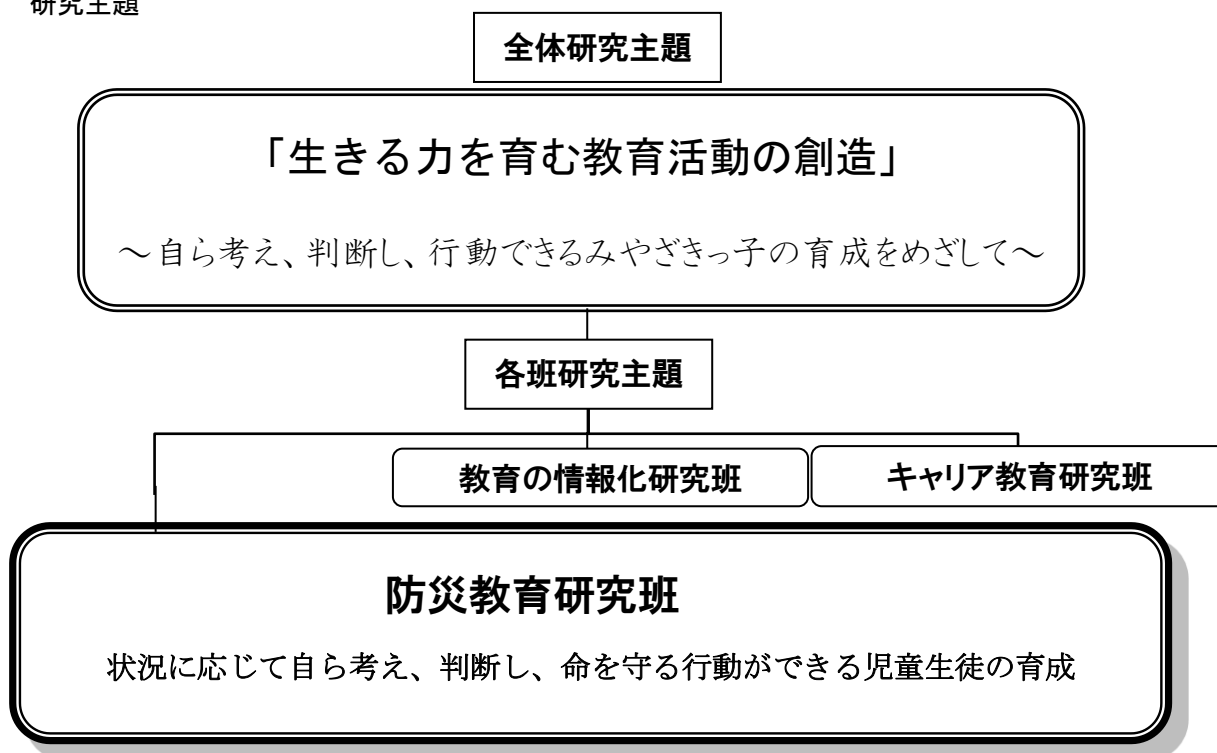


I 研究主題



II 主題設定の理由

21世紀の知識基盤社会においては、生きる力を支える「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の調和のとれた児童生徒の育成が求められている。さらに、教科等を横断して改善すべき事項として、情報教育、キャリア教育、安全教育などがあげられている。

また本市においては、「宮崎で育ち、学ぶことを通して、郷土に誇りと愛着を持つ感性豊かな子どもたちの育成」を「目指すべき姿」として、「宮崎市教育ビジョン」が策定され、その中で、確かな学力やキャリア教育等の充実が求められている。また、東日本大震災の教訓や日向灘域の地震の活動化を受け、本年度より市内の小中学校に新たに防災主任を置いた。さらに、本年度中に、市内すべての小中学校のコンピュータを入れ替え、教育の情報化のさらなる推進に努めているところである。

これらの社会や宮崎市の状況を踏まえ、本研究班においては、状況に応じて自ら考え、判断し、命を守る行動ができる児童生徒の育成について究明することにした。

本来、防災とは、風水害、火災などの全ての災害を防ぐという意味であるが、2011年に東日本大震災が起きたことと日向灘域でいつ地震が発生してもおかしくない状況であることから、地震・津波を対象にした防災教育を研究することにした。地震・津波が起きるメカニズムと地震が起きている際の避難の方法や津波から避難する方法を学ぶ防災学習と、より安全に地震・津波から避難するための避難訓練を計画、実践することで、状況に応じて自ら考え、判断し、命を守る行動ができる児童生徒を育成できると考えた。

III 研究目標

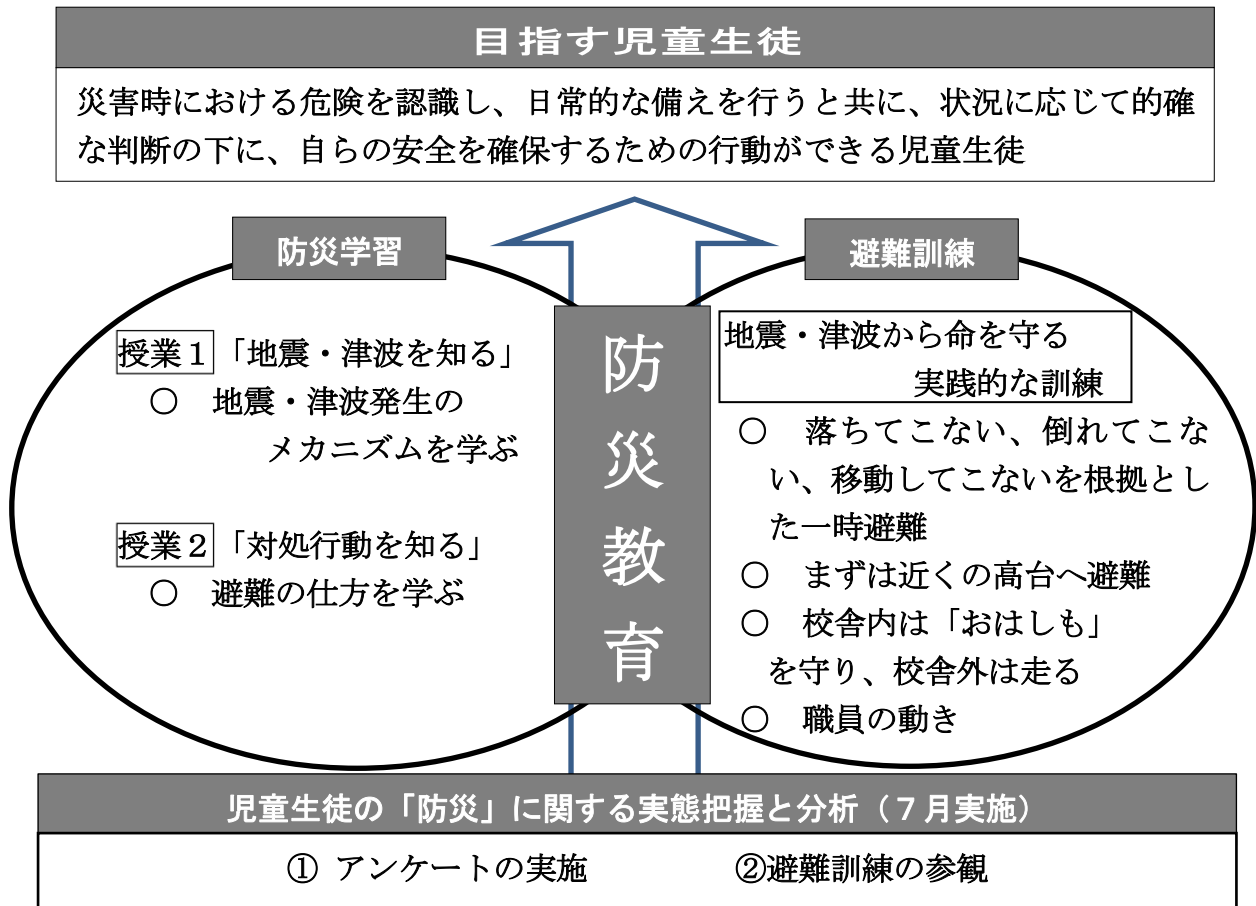
災害時における危険を認識し、日常的な備えを行うと共に、状況に応じて的確な判断の下に、自らの安全を確保するための行動ができる児童生徒の育成の在り方を究明する。

IV 研究仮説

地震・津波に関する基礎的・基本的事項を理解させる授業を行い、避難の方法を見直せば、災害時における危険を認識し、日常的な備えを行うと共に、状況に応じた確かな判断の下に、自らの安全を確保するための行動ができる児童生徒の育成が図られるだろう。

V 研究構想

研究構想を図に表すと、【図 1】となる。



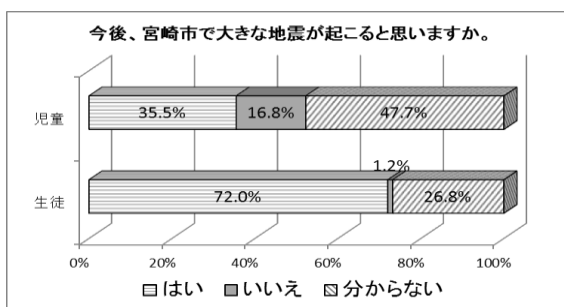
【図 1】 研究構想

VI 研究の実際

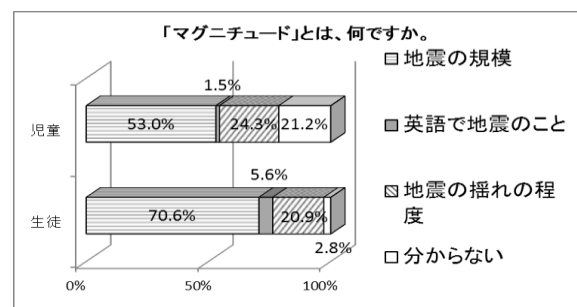
1 実態把握

(1) 意識調査実施・結果分析

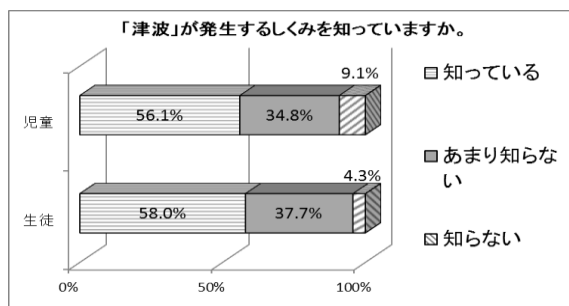
平成24年7月に研究員の勤務する小学2、4、6年児童（155名）と中学1、2、3年生徒（99名）を対象に地震・津波に関する意識調査を行った。【図 2】から【図 5】はその結果である。



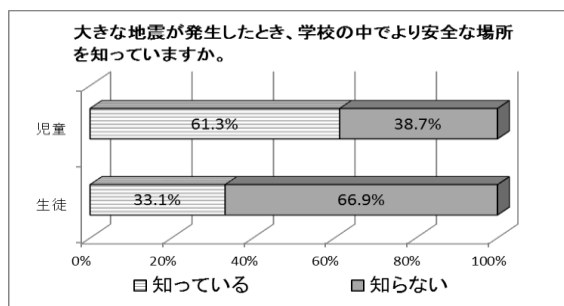
【図 2】



【図 3】



【図 4】



【図 5】

【図 2】より、「宮崎市で大きな地震が起こると思いますか」の問いに、「思わない」、「分からない」と答えた児童が 65%、生徒が 28%いることが分かる。そこで、宮崎市でも大きな地震が起こる可能性はあることを理解させる必要があると考えた。また【図 3】からマグニチュードの意味を正しく理解していない児童は 47%、生徒は 29%、【図 4】から津波が発生するしくみを「あまり知らない」、「知らない」と答えた児童は 44%、生徒は 42%いることが分かる。そこで、地震・津波の起こり方や地震・津波に関する基本的事項を理解させる必要があると考えた。【図 5】から、大きな地震発生時に校内における安全な避難場所を「知らない」と答えた児童は 39%、生徒は 67%いるので、大きな地震が起こった場合に、校内でのより安全な避難場所について考えさせる必要があると考えた。

(2) 避難訓練の分析（7月）

7月11日（水）に、恒久小学校で避難訓練が実施された。現段階での避難の仕方や流れをビデオ撮影し、実態を把握した。

ア 概要

- ・ 清掃時間中の実施
- ・ 日向灘域を震源とする地震発生と想定。震度7の揺れがある。揺れがおさまった後に緊急速報で津波警報が出る。
- ・ 児童は、予め決められた校舎の3階に避難をする。

イ 児童の実態と反省

避難をする際に、近くの児童同士で「走ったらだめ。」と声をかけていた。避難をするときは、落ち着いて避難をすることができていた。また、避難後は、ほとんどの児童が整列し、静かに待つことができていた。しかし、緊急地震速報後の身の安全が確保できていない児童が多く、地震の効果音が流れていても歩いて避難をしていた。そのため、地震から津波のメカニズムを理解させ、まずは揺れから身の安全を守ることの徹底が必要だと感じた。

ウ 職員の実態と反省

避難場所が予め決められていることは、児童にとっても職員にとってもわかりやすいと感じた。避難後は、出席番号順に静かに座らせることで、人数把握がしやすかった。しかし、揺れている最中に移動をしている児童が多く、事前学習での緊急地震速報から避難までの流れや動きの徹底が足りなかった。また、3階の連絡通路に職員を配置する必要があると感じた。職員を配置したうえで、違う校舎に行った児童の移動は、1・2階ではなく、可能な限り3階を通行する方がよいと感じた。

2 研究内容

(1) 授業づくり

意識調査の結果と避難訓練の児童の様子から、地震や津波への危機意識を高めるとともに、地震や津波がいつ起きてもそれに適切に対処でき、自分の命を確実に守ることができるような防災学習を行う必要があると考えた。

そこで、「釜石市の津波防災教育のための手引き」を参考に授業づくりを行い、指導の概略を【表1】のように考えた。

【表1 防災学習の指導の概略】

題材名	地震・津波を知る					題材名	地震・津波への対処行動を知る				
指導する学年	全学年	指導する時間	学級活動	指導する時間	1時間	指導する学年	全学年	指導する時間	学級活動	指導する時間	1時間
目 標	地震や津波の起き方を知り、日本では大きな地震や津波が発生しやすいことを理解することができる。					目 標	地震・津波が発生したときに、自らの安全を確保する対処の仕方を理解することができる。				
使用する教材	(写真) 被災写真(阪神淡路大震災、東日本大震災) (資料) 過去約100年間で日向灘にて発生したM6以上の地震の発生履歴と予測 (資料) 震央の分布図 (資料) プレート図 (動画) DVD「みんなで学ぶ防災知識」 (動画) DVD「津波から逃げる」					使用する教材	(資料) 過去約100年間で日向灘にて発生したM6以上の地震の発生履歴と予測 (写真) 各教室の写真 (動画) DVD「津波から逃げる」 (動画) 宮崎県内の津波シミュレーション(アニメーション)				
学 習 内 容	(導入) (1) 大きな地震の写真から地震や津波の恐ろしさを知る。 (2) 宮崎県でも大きな地震が起こる可能性があることを知る。 (3) アンケート結果を知る。 (展開) (1) 地震の起き方を知る。 (2) 津波の起き方を知る。 (終末) (1) 地震・津波の起き方をクイズ形式のワークシートで確認する。 (2) 感想等を記入し、発表する。					学 習 内 容	(導入) (1) 前時の学習内容を確認する。 (展開) (1) 地震が起きた時の安全の確保の仕方を考える。 (2) 案内掲示板の示す意味を知る。 (3) 津波から避難する方法を考える。 (終末) (1) 地震・津波から安全に避難する方法をクイズ形式のワークシートで確認する。 (2) 感想等を記入し、発表する。				

(2) 避難訓練改善の視点づくり

7月に実施した避難訓練により、①児童の行動改善と、②職員の行動改善・徹底の2つの視点から避難訓練を改善していく必要があると認識した。

ア 児童の行動改善の視点及び手立て

- (ア) 児童の実態より、「緊急地震速報後にまず身の安全を守る」ができていないことがわかった。緊急地震速報後にやってくるのは地震なので、まず身の安全の確保が重要である。その際、「安全の根拠」を示す必要がある。
- (イ) 揺れがおさまった後の行動として、「お・は・し・も」を守りながら校舎の3階に上がることを共通実践することが重要である。しかし、

【表2 児童の行動改善の視点及び手立て】

<p>① 緊急地震速報(地震がきますという意味、きましたではない)</p> <p>↓</p> <p>(すぐに)地震の効果音(揺れているという意味)、児童は身の安全の確保、職員も一緒に身の安全を守る</p> <p>↓</p> <p>効果音が終わったら決められた避難場所に避難</p> <p>↓</p> <p>津波が来る旨の放送を流す</p> <p>安全の根拠を「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」とする。 <small>の流れを事前指導の確認に組み込む。</small></p>
<p>② 校舎内は走らない、校舎外は走る の徹底。 揺れが収まった後、校舎外に出ている児童は、土足のまま一番近い校舎に入り、まず3階に避難する。校舎間の移動は、3階のみで行う。 <small>を防災学習の指導内容に組み込む。</small></p>
<p>③ 率先避難の考え方を指導しつつ、共助の考え方も指導。 <small>を防災学習の指導内容に組み込む。</small></p>

校舎外から避難をしてくる児童に関しては走って校舎に向かうことが必要である。また、校舎に入った後、1・2階の校舎間移動ではなく、3階での移動を徹底させる必要がある。

(ウ) 揺れがおさまった後の避難行動で、まずは率先避難が最優先である。しかし、「自分だけ避難をすればよい」のではなく、「共助」の考え方をもちることが大切であるので、特に上級生には指導する必要がある。

以上のことより、児童の行動改善の視点及び手立てを【表2】のように考えた。

イ 職員の行動改善・徹底の視点及び手立て

(ア) 避難訓練の実態より、緊急地震速報から3階に避難するまでの流れを事前指導で徹底させることが必要である。

(イ) 身の安全を守り、揺れがおさまった後「まず近くの校舎の3階へ上がる」ことを徹底させることが必要である。校舎間移動は、3階のみで行うことも確実に指導する。

(ロ) 校舎間移動は、全員3階の連絡通路を通すので、職員配置を変更し、通路傍に職員を配置することが必要である。

(ハ) 各校舎の責任者（校長・教頭）

の連絡の取り方や場所を再考し、いつ、どこで、どのように連絡を取り合うかを決めて実施する必要がある。

以上のことより、職員の行動改善・徹底の視点及び手立てを【表3】のように考えた。

【表3 職員の行動改善・徹底の視点及び手立て】

① 事前指導を充実させる。
② 職員配置を変更する。3階連絡通路の出入りに職員を一人配置する。校舎間を移動する児童を見ながら連絡し合うほうがよいと考え、教頭に南校舎の3階連絡通路に立ってもらおう。

3 研究内容の検証

(1) 検証授業

ア 小学校 第6学年「学級活動」（題材名：地震・津波の起き方を知ろう）

(ア) 本時の目標

地震・津波の起き方を知り、日本では大きな地震や津波が発生しやすいことを理解することができる。

(イ) 学習指導過程

段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点	準備物
導入	1 大きな地震による被災写真を見て、地震・津波の恐ろしさを知る。	○ 建物が壊れてしまうだけでなく、地面も崩れてしまうことを確認する。	写真
	2 宮崎県（市）でも大きな地震が起きる可能性があることを知る。	○ 地震の歴史年表をもとに、今後、日向灘域で大きな地震が発生する可能性があることを確認する。	年表
	3 アンケート結果から、自分のこれまでの防災意識を知る。	○ 事前に実施したアンケート結果から、今までの防災に対する意識面の課題に気付かせ学習への目的意識をもたせる。	アンケート結果
	4 本時のめあてを確認する。 地震・津波の起き方を知ろう。	○ めあてを立て、全体で確認する。	

展 開	5 地震の起き方を知る。 (1) 地震分布を示す資料を見る。 (2) 地震が起きる原因を知り、日本は地震が起りやすいことを知る。	○ 日本列島の周辺には、4つのプレートが重なり合っているため、地震が多いことをおさえる。 ○ 地震が起きるとなぜ津波が発生するのか、班ごとに話し合わせる。また、地震によって生じた海水面の差が津波になることをおさえる。	資料 映像 プレート図 映像
	6 津波の起き方を知る。 (1) 津波の起き方を考える。		
終 末	7 本時のまとめをする。 (1) 地震・津波の起り方をワークシートで確認する。 (2) 次の学習内容を確認する。	○ 本時の授業の感想をワークシートに記入し発表させる。 ○ 次時は、地震・津波への対処行動について学習することをおさえる。	ワークシート (クイズ形式)

(ウ) 授業の実際

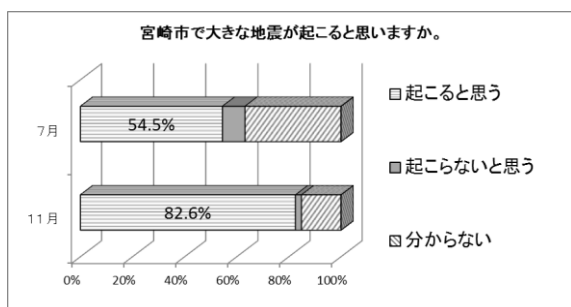
導入場面では、地震・津波の恐ろしさを認識する写真や映像を見せ、また、宮崎市でも大きな地震が起きる可能性があることを示す資料を提示した。さらに、自分たちの防災意識が低いことを示すアンケート結果を提示した結果、児童の側から地震・津波の起き方や避難の仕方について学習する必要があるという意見が出され、本時のめあて設定を行った。展開場面では、まず、地震の発生メカニズムを理解させるために、地震発生地点を示す分布図を提示し、4つの大きなプレートが重なっているという日本の地理的状況に気付かせ、日本は地震が多く発生する国であることをおさえた。津波の発生メカニズムについては、班ごとに話し合う時間を設定した。児童は、日向灘域が震源地だった場合の映像を想起しながら、津波の起き方について意見を出し合い、真剣に考え発表することができていた【図6】。終末場面では、本時の学習内容の確認のために、クイズ形式のワークシートに取り組みさせた。その様子から、児童一人一人の地震・津波の起き方についての理解度を確認することができた。「初めて地震・津波について真剣に考えた。色々なことが分かった。これからは、防災意識を高め、いつ大きな地震が来ても大丈夫なように備えをしっかりとしておきたい。」と感想を書いている児童もいた。



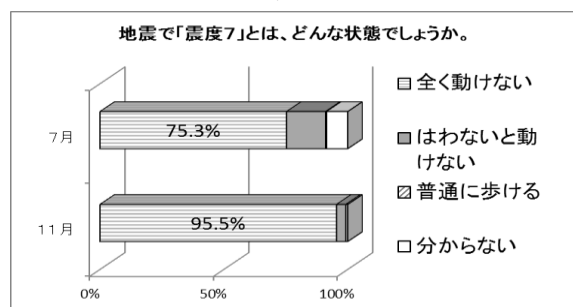
【図6 授業の様子】

(エ) 成果

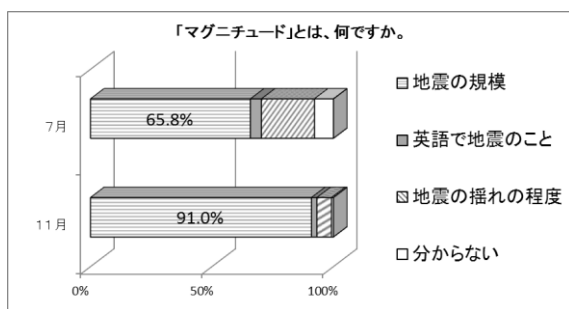
授業後に行った意識調査（対象は7月実施と同じ）の結果では、「宮崎市で大きな地震が起きると思う」【図7】と答えた児童生徒は7月に比べて28%増えた。また、「震度7の状態」【図8】や「マグニチュードの意味」【図9】についての正答率が上がり、「津波が発生するしくみを知っている」【図10】と答えた児童生徒が37%増えるなど、授業を通して大きな地震が起こることへの危機意識を高めることができ、地震や津波に関する基本的な知識の理解度が高まったと考える。



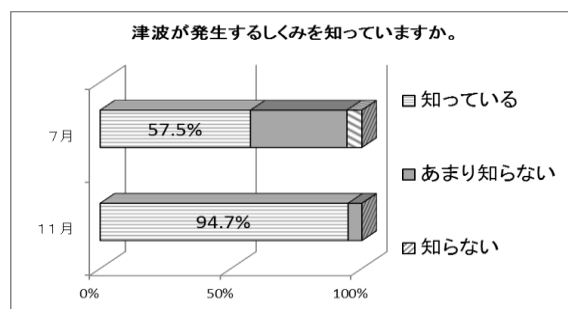
【図7】



【図8】



【図 9】



【図 10】

イ 中学校 第3学年「学級活動」(題材名：地震・津波への対処行動を知ろう)

(ア) 本時の目標

地震・津波が発生したときに、自らの安全を確保する対処の仕方について理解することができる。

(イ) 学習指導過程

段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点	準備物
導入	1 前時の学習を振り返る。 2 本時の学習課題を把握する。	○ 前時の学習内容を振り返り、地震・津波が起きるメカニズムについて確認する。	資料 写真
	地震・津波から、安全に身を守る対処の仕方を知ろう。		
展開	3 地震による揺れが起きた時の安全の確保の仕方を学習する。 (1) 揺れているとき (2) 揺れがおさまった後	○ 緊急地震速報を流し、様々な状況下における地震発生時の様子を想像させ、身の回りにある具体的な危険物について、意見を出させる。 ○ 安全な場所の根拠(落ちてこない、倒れてこない、移動してこない)を確認する。	写真 動画 DVD
	4 津波から避難する方法を知る。 (1) 津波ハザードマップで確認する。 (2) 状況に応じて避難の仕方を考える。 (3) DVDを見て、避難について確認をする。	○ 数分で津波が到達することもあるので、率先して避難を開始する、とにかく高い所に逃げる、想定にとらわれないことを指導する。 ○ 避難をする時には「共助」の考え方も大切であることを指導する。 ○ 校内では「おはしも」を守り走ってはいけないが、校外では走って高台に移動することを指導する。	
終末	5 本時のまとめを行う。 (1) ワークシートで確認する。 (2) 学習のまとめをする。	○ ワークシートに記入させる。 ○ 地震・津波から身を守るための行動のポイントについて全体で確認する。	ワークシート (クイズ形式)

(ウ) 授業の実際

地震から身を守る避難では、校内の8か所(教室、グラウンド、トイレ、調理室、図書室、体育館、廊下、靴箱)をグループに割り当て、安全な身の守り方を話し合わせて発表させた。生徒は、地震の時には場所によって危険なものかわることを、他の班の意見から気付いて

いた【図 11】。各班の発表内容をまとめ、安全の定義（落ちてこない、倒れてこない、移動してこない）を掲示し、全体で確認した。

地震発生後の津波から身を守る避難では、学校外の環境を想定し、班で話し合わせた。多くの班では、すぐに近くの高い建物や場所に避難するという点で意見が一致していた。自分が避難するときに、他の人たちに声を掛けながら避難するという意見もあり、他の班から賛同を得ていた。

授業の最後には、宿題としてプリント【表 4】を配付し、災害時における連絡方法や避難場所等について家族で確認させることにした。



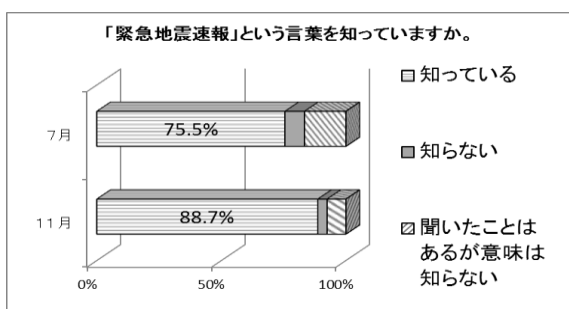
【図 11 授業の様子】

防災学習を踏まえて	
____年 ____組 ____番 名前 ()	
☆ 家族で地震や津波のことを話し合ってみよう。	
① 家にいるときに大きな津波が来るとしたら、どこに逃げますか。	
② 家族とはなればなれになったら、どこに集合しますか。	
③ 家族とはなればなれになったら、どうやって連絡をとりますか。	
④ 白頭から、地震や津波について気をつけていることがありますか。 例えば、「家具が倒れないように固定している。」「非常持ち出し用を準備している。」など	

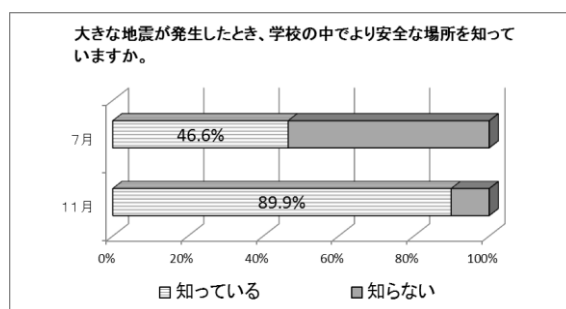
【表 4 家族で話し合ってみよう】

(エ) 成果

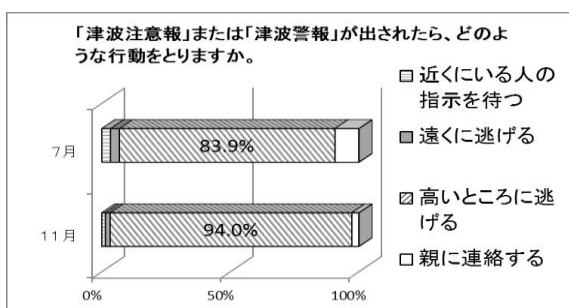
授業後に行った意識調査（対象は7月実施と同じ）の結果では、「緊急地震速報を知っている」と答えた児童生徒は 13%【図 12】、「大きな地震が発生したとき、学校の中でより安全な場所を知っている」が 43%【図 13】、「津波注意報または津波警報が出されたときの行動」として「高いところに逃げる」が 10%【図 14】と、それぞれ増えており、地震や津波が発生したときの対処行動についての理解が深まったと考える。また、「家族が離れているときの集合場所を決めている」【図 15】、「家族が離れているときの連絡方法を決めている」【図 16】は7月の調査結果に比べ、ともに 27%増えており、宿題として活用したプリントが効果的であったことが分かる。さらに、「大災害時への備えとして最も大切なこと」を「自分自身で災害に備える」【図 17】とした回答が 35%増えるなど、児童生徒の意識が高まったと考える。



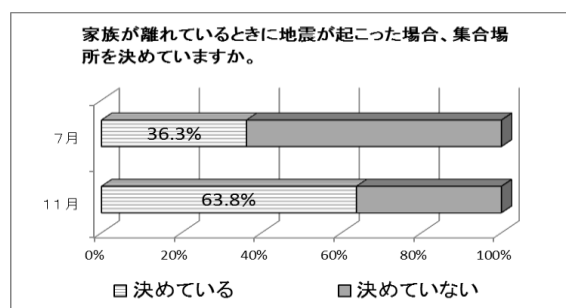
【図 12】



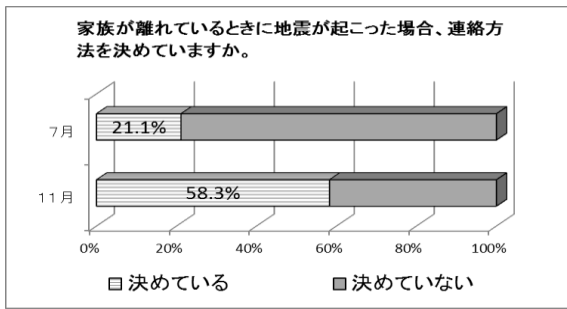
【図 13】



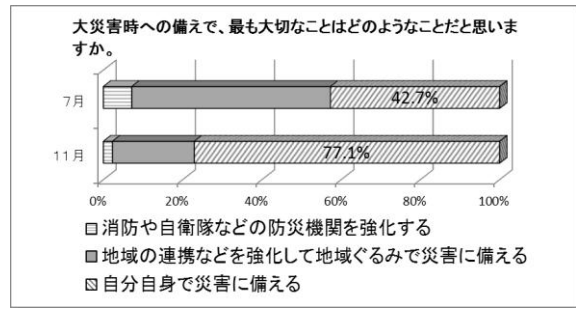
【図 14】



【図 15】



【図 16】



【図 17】

(2) 避難訓練の分析 (11月)

11月26日(月)に、恒久小学校で避難訓練が実施された。防災学習後の避難訓練がどのように変化したかをビデオ撮影し、様子をみた。学習指導案【表5】において、波線は児童の行動改善の視点及び手立て、下線は職員の行動改善・徹底の視点及び手立てとして記載した。

ア 概要

- ・ 昼休み時間中の実施
- ・ 日向灘域を震源とする地震発生と想定。震度7の揺れがある。揺れがおさまった後に、緊急速報で津波警報が出る。
- ・ 児童は、予め決められた校舎の3階に避難をする。
- ・ 停電のため放送が使用できない。

【表5 避難訓練の学習指導案】

イ 児童の行動の変容

防災学習との連携で、緊急地震速報から避難までの流れを理解し、実践できた児童が増えた【図18、図19】。まず近い校舎の3階に上がる行動が増え、校舎間移動も3階を使用する人数が増えた。共助の考え方も浸透し、上学年の児童が下学年の児童を誘導する姿が見られた。しかし、事前指導が不十分であり、全員の行動が徹底できていなかった。今後の事前指導のあり方が課題である。

ウ 職員の行動の変容

職員の反省の中に、「確認場所を見る際に、その区域を複数で見ることができたのですごく早かった。」というものがあつた。また、教頭の立つ場所を3階連絡通路に変更

時間	活動内容	留意点等
事前指導	① 校舎内では、児童は上履きを履く。 ② 防災教育で学習した地震・津波の際の対処行動の確認をする。 ③ 避難する際に気をつけることの確認。 ・ 避難経路の確認と確保 ・ 「おはしも」の確認 ・ 笛の鳴らし方 ・ 揺れが収まった後、校舎外に出ている児童は、下足のまましばらく近い校舎に入り、まず、3階に避難する。校舎間の移動は、3階のみで行う。 ④ 揺れの強い地震(訓練では、地震の効果音)が収まった後、指示を待たずに児童自ら避難することの確認。	○ 上履きがない児童には体育館シューズを履かせる。 ○ 防災教育で指導した「落ちてこない・倒れてこない」を根拠にした避難行動を徹底させる。 ○ 校舎内は右側歩行で、「おはしも」(押さない・走らない・しゃべらない・戻らない)を守らせる。 ○ 校舎外は走って避難させる。 ○ 階段は空いているスペースを使って上がらせる。 ○ 笛の鳴らし方を確認しておく。 (津波時)「ピーピッピー」の3回を繰り返す。 (不審者侵入の時)「ピー」の1回を繰り返す。 ○ 訓練時と実際の違いを説明しておく。
13:25	1 緊急地震速報と揺れの強い地震の効果音を放きで聞き、身の安全を確保してから、避難する。 <地震が来る前の指示例> ○ 物が落ちそうな所から離れ、頭を守りなさい。 ○ 物が倒れてこない所に移動しなさい。 ○ 机の下にもぐりなさい。 <地震が収まった後の指示> 津波がきます。あわてず、まず、近くの校舎の3階に避難します。 ※ 状況に応じて笛を吹く。	・ 早めに教室等のドア・窓を開け、避難経路を確保する。 ・ 職員は、近くの児童に「落ちてこない・倒れてこない」所に避難をさせ、頭を守り、低い体勢をとるように指示しながら、児童と一緒に身の安全を守る。 ・ 職員は、時計で地震が発生した時刻を確認し、早くて5分後に津波が到着することを意識しておく。 ・ 職員(特に、校長、教頭、主幹教諭、生徒指導主事、防災主任及び事務室の職員)は、ラジオ等により、津波に関する情報を収集する。(同時に、対策本部の設置) ・ 3階の連絡通路を移動する児童の指示・誘導をする。 ・ 校長・教頭は、児童の状況をトランシーバーで常に連絡を取り合う。
13:37	2 避難完了後の児童・職員の安全確認と決められた確認場所の報告をする。 ・ 学級担任→学年主任→校長・教頭へ報告をする。	・ 3階に常備している名簿を用いてクラスの児童の名前と怪我の状況等を把握する。 ・ 児童の安全の状況を中校舎は校長へ、南校舎は教頭へ報告する。

したので、児童把握の速さや正確さが向上したが、児童を探しに行く職員の連絡方法や、3階通路の行き来を誰が許可するのか等の課題は多い。また、様々な場面で避難訓練を実施するための年間指導計画を立て、段階的に実施する必要性を感じた。



【図 18 校舎内での避難の様子】



【図 19 校舎外での避難の様子】

VII 成果と課題

1 研究の成果

地震・津波に関する基礎的・基本的事項を理解させる授業と避難訓練を関係付けて行ったことで、防災への意識が高まり、主体的に思考・判断して、より実践に即した訓練とすることができた。また、避難訓練を通して見えてきた課題を防災学習の授業の中で指導することができるなど、相関関係を生かした取組を行うことができた。さらに、地震・津波への対処方法を考える授業を実施することで、職員自身も学校内の施設を見直したり、学校外の避難ルートなどを視野に入れたりすることができた。

2 研究の課題

今年度、学級活動の時間において、地震・津波の起き方や対処の仕方についての授業を一時間ずつ行った。しかし、学級活動の時間だけでなく、他教科等の中でも、地震・津波について関連付けた学習内容を指導していく必要性を感じた。

今後は、宮崎市教育委員会が作成する防災教育に関するカリキュラム（防災教育の手引き）等を活用し、全教育活動の中で防災教育の充実を図っていく必要がある。

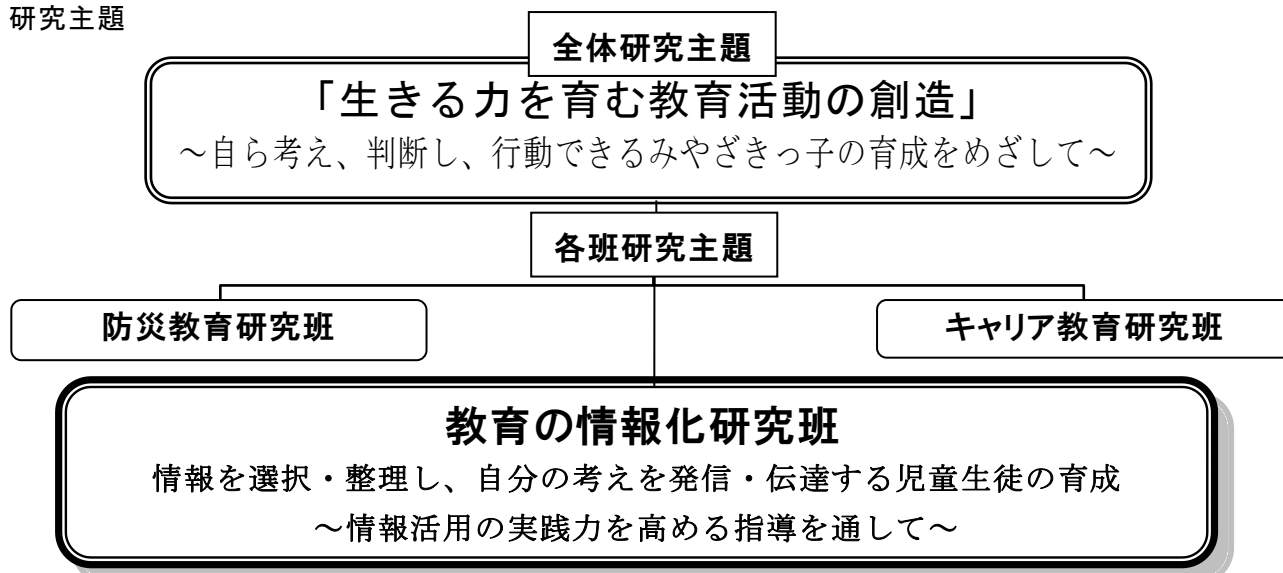
<引用・参考文献>

- 「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育（文部科学省、平成22年3月）
- 学校防災マニュアル（地震・津波災害）作成の手引き（文部科学省、平成24年3月）
- 「東日本大震災を受けた防災教育・防災管理等に関する有識者会議」最終報告（東日本大震災を受けた防災教育・防災管理等に関する有識者会議、平成24年7月）
- 釜石市津波防災教育のための手引き（釜石市教育委員会・釜石市市民部防災課・群馬大学災害社会工学研究室、平成22年3月）
- みやぎきの自然災害 地震・津波・火山・気象災害を知って備える（みやぎき公共・協働研究会、平成24年6月）

<研究同人>

所 長	有村 政美	
指導主事	楠田 隆	
研 究 員	錦織 謙一（恒久小学校）	黒田 芳伸（檜中学校）
	山田 啓子（住吉小学校）	児玉 健（宮崎中学校）
	中村 貴一（小戸小学校）	栗畑 宏輔（赤江中学校）

I 研究主題



II 主題設定の理由

21世紀の知識基盤社会においては、生きる力を支える「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の調和のとれた児童生徒の育成が求められている。さらに、教科等を横断して改善すべき事項として、情報教育、キャリア教育、安全教育などがあげられている。

また本市においては、「宮崎で育ち、学ぶことを通して、郷土に誇りと愛着を持つ感性豊かな子どもたちの育成」を「目指すべき姿」として、「宮崎市教育ビジョン」が策定され、その中で、確かな学力やキャリア教育等の充実が求められている。また、東日本大震災の教訓や日向灘域の地震の活動化を受け、本年度より市内の小中学校に新たに防災主任を置いた。さらに、本年度中に、市内すべての小中学校のコンピュータを入れ替え、教育の情報化のさらなる推進に努めているところである。

一昨年度より、本研究班では、実物投影機を中心とした ICT 機器の活用についての研究を進めており、授業における ICT 機器の活用が市全体でも図られ始めている。しかし、「全国学力・学習状況調査」では、児童生徒の学力の課題として「さまざまな学習場面で、習った知識・技能を活用し、思考・判断・表現できる能力を育む必要があること」等が挙げられている。今後は、ICT 機器の活用を進めるとともに、課題となった学力を身に付けることにも目を向ける必要がある。

そこで、本年度は、児童生徒の思考・判断・表現できる能力を育むために「情報活用の実践力」を高めていくことに注目した。情報活用の実践力とは、情報教育の目標の一つであり、「課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・処理・編集・創造・表現し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力」である。宮崎市の全体研究主題である「自ら考え、判断し、行動できるみやざきっ子の育成」をめざし、本研究班では、情報活用の実践力を高める指導の工夫を通し、「情報を適切に選択・整理し、自分の考えを発信・伝達する児童生徒の育成」を研究主題として研究を行うことにした。

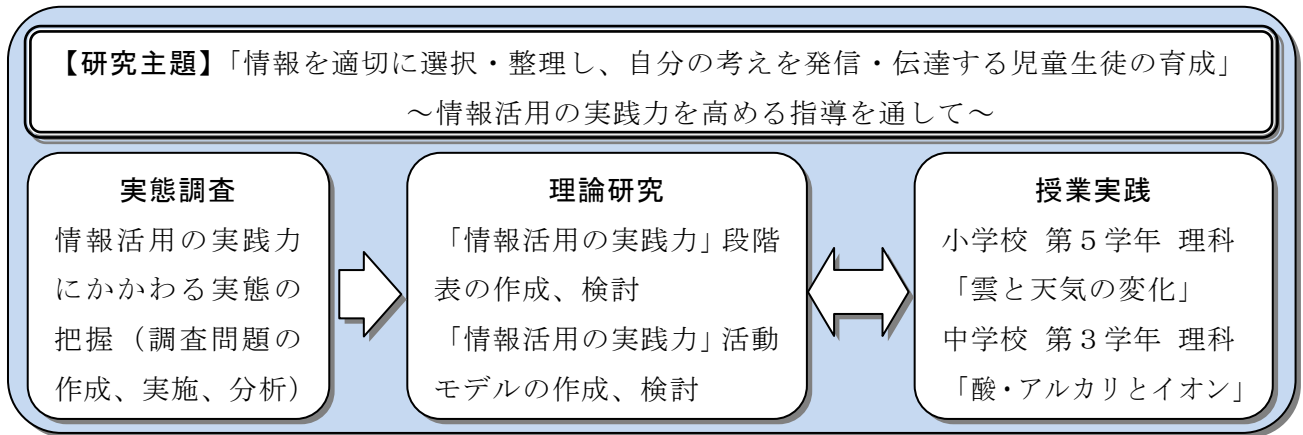
III 研究目標

情報を適切に選択・整理し、自分の考えを発信・伝達する児童生徒を育成するために、情報活用の実践力を高める指導の在り方を究明する。

IV 研究仮説

児童生徒の実態を踏まえ、「情報活用の実践力」を育成するための段階表や活動モデルを作成し、学習指導過程に位置付け授業を実践すれば、情報を適切に選択・整理し、自分の考えを発信・伝達する児童生徒を育成することができるであろう。

V 研究構想



VI 研究の実際

1 実態調査

情報活用の実践力にかかわる実態調査を行うにあたり、「情報活用の実践力尺度の作成と信頼性及び妥当性の検討」（1999 高比良ら）¹⁾を参考にした。高比良らは「情報活用の実践力」を収集力、判断力、表現力、処理力、創造力、発信・伝達力の6つの能力とし、【表1】のように説明している。

【表1】「情報活用の実践力」の各能力とその内容

能力名	能力の内容
収集力	目的に応じて必要な情報をもれなく適切な手段で主体的に収集する能力
判断力	数多くある情報の中から必要なものを選択し、内容を判断し、適切な情報を引き出す能力
表現力	情報表現の特性を理解し、伝えたい情報を適切な形式で表現する能力
処理力	収集した情報に適切な処理を加えて、必要な情報を読み取る能力
創造力	自分の考えや意見をもち、情報を創造する能力
発信・伝達力	受け手の立場や情報を処理する能力を意識して、情報を発信・伝達する能力

これら6つの能力の内容を基に、授業における情報活用の実践力について実態調査（対象：小学校3校・中学校3校の教員113名、実施時期：9月）を行った。アンケートは【図1】のように、1つの能力について5つの質問を設け、4段階で回答するようにした。【図2】は、各能力について、5つの質問の合計をまとめた集計結果である。小学校の低・中・高学年、中学校の4つの段階に分け集計を行った。

2 児童生徒の情報活用の実践力の実態について、番号でお答えください。

1 とてもあてはまる	2 だいたいあてはまる
3 あまりあてはまらない	4 まったくあてはまらない

(1) 収集力

- 興味をもったことについては、人に言われなくても進んで調べることができる。
(1 2 3 4)
- 授業中わからないことがあったら、先生に質問をしたり、教科書や参考書で調べたりしている。
(1 2 3 4)
- わからない事柄があったら、辞書や辞典を引くようにしている。
(1 2 3 4)
- わからない事柄があったら、インターネットを使って調べている。
(1 2 3 4)
- 新聞やテレビのニュースをよく見ている。
(1 2 3 4)

【図1】情報活用の実践力についてのアンケート（一部）

小・中学校を通してみると、肯定的な回答が半数を超えている能力はほとんどないことが分かる。その中で特に低いのは、「判断力」、「創造力」である。「判断力」については、どの発達の段階においても低い傾向にあった。

小学校では、低学年において、「まったくあてはまらない」がすべての能力で40%を超えているが、中・高学年では、20%以下である。

中学校でも、すべての能力で「まったくあてはまらない」は20%以下であるが、肯定的な意見は4つの能力で小学校高学年を下回っている。

これらの結果から、情報活用の実践力を高めるためには、次のようなことが必要ではないかと考えた。

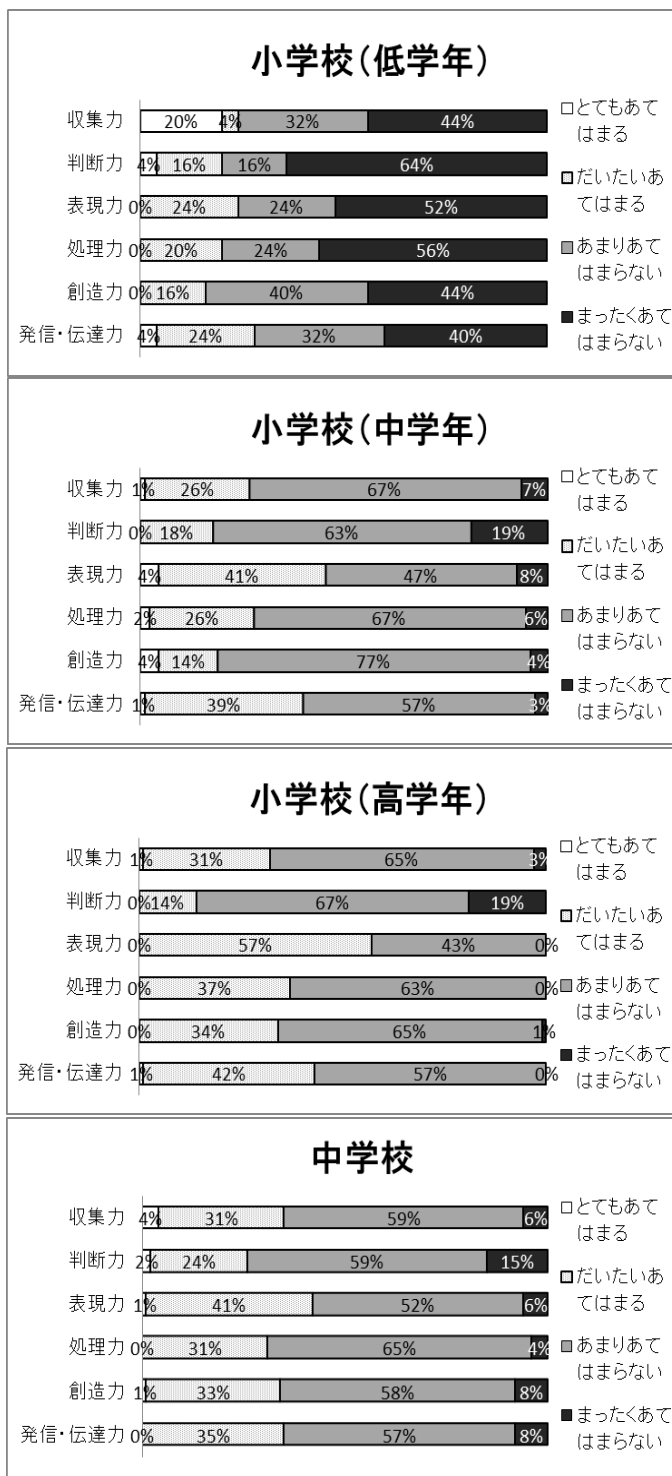
- 教師が発達の段階ごとに指導すべき内容を把握しておく。
- 教師が普段の授業の中で、各能力を高めることを意識して指導する。

そこで、本研究では、それぞれの発達の段階における「情報活用の実践力」を高めるための学習活動を明確にし、授業の中でどのような手立てを講ずれば、「情報活用の実践力」の6つの能力を高めることができるのかを研究していくことにした。

具体的には、6つの各能力を高めるために、どの学年で、どのような学習活動を行うのかを明記した「段階表」を作り、教師の指導の手がかりとなるようにした。また、授業の中で、それぞれの能力のかかわりや学習プロセスを表した「活動モデル」を作成し、学習指導過程に位置付け、実践することにした。

2 理論研究

【表1】の『情報活用の実践力』の各能力とその内容を具体的に分かりやすいものにするために、本市の児童生徒の実態を踏まえ、本研究班における各能力の解釈を【表2】のようにし、各能力にA~Fの記号を付けて表した。



【図2】「情報活用の実践力」実態調査結果

【表 2】本研究における「情報活用の実践力」の各能力の解釈

能力名	本研究班による解釈
A 収集力	課題や問題を基に、進んで情報を集め、調べることができる。
B 判断力	集めた情報が正しいか見極め、必要な情報を見つけ出すことができる。
C 表現力	文・図・表を作成するなど、情報を整理することができる。
D 処理力	整理した情報から筋道を立てて考え、分析することができる。
E 創造力	得た情報に自分の見方、考え方を加え、作り変えることができる。
F 発信・伝達力	相手に伝わるように、自分の考えを分かりやすく伝えることができる。

(1) 段階表の作成・検討

【表 2】の解釈を基に、「情報活用の実践力」の各能力を伸ばすための具体的な学習活動を検討し、【表 3】のような『情報活用の実践力』段階表を作成した。

【表 3】「情報活用の実践力」段階表

能力名	段 階	小学校			中学校		
		低学年	中学年	高学年	1年	2年	3年
A 収集力	課題や問題を基に、進んで情報を集め、調べることができる。	①分からないことがあったら、先生や友達に質問する。 ②分からないことがあったら、辞書や辞典などの書籍を積極的に活用する。 ③学習課題を解決するのに、体験や実験・観察を通して得た情報を積極的に活用する。			①分からないことがあったら、先生や友達に質問する。 ②分からないことがあったら、辞書や辞典などの書籍や学習ノートを積極的に活用する。 ③分からないことがあったら新聞やテレビ、インターネット等の情報媒体を積極的に活用する。 ④学習課題を解決するのに、体験や実験・観察を通して得た情報を積極的に活用する。		
B 判断力	集めた情報が正しいか見極め、必要な情報を見つけ出すことができる。	①たくさんの資料の中から必要な情報を見つけ出す。 ②人の意見を聞き、情報の良し悪しを判断する。			①たくさんの資料の中から必要な情報を見つけ出す。 ②新聞やテレビ、インターネット等の情報媒体から得た情報が正しいかどうか判断する。 ③対立する意見があるときは、両方の言い分を聞き、それぞれの情報の良し悪しを判断する。		
C 表現力	文・図・表を作成するなど、情報を整理することができる。	①文章を読むときに大切などところに線を引く。	①たくさんの情報を集めたときは、種類ごとに分類する。 ②文章を読むときに大切などところに線を引く。 ③調べたことをまとめるとき、文章だけでなく、図、表なども活用する。		①たくさんの情報を集めたときは、種類ごとに分類する。 ②文章を読むときに大切などところに線を引いたり、コメントを書き加えたりする。 ③調べたことをまとめるとき、文章だけでなく、図、表、グラフなども活用する。		
D 処理力	整理した情報から筋道を立てて考え、分析することができる。	①答えの理由を考えながら問題を解く。 ②多くの情報から共通点を見つけ出す。			①問題を解くときに、筋道を立てて考える。 ②多くの資料や意見を検討して、学習課題に対する結論を導く。 ③図や表にまとめられた資料から必要な情報を読み取る。	①問題を解くときに、客観的な根拠に基づいて、筋道を立てて考える。 ②多くの資料や意見を検討して、学習課題に対する結論を導く。 ③図や表にまとめられた資料から必要な情報を読み取る。	
E 創造力	得た情報に自分の見方、考え方を加え、作り変えることができる。	①人の意見に流されず、自分の考えをもつ。	①人の意見に流されず、自分の考えをもつ。 ②自分の考えを伝えるのに必要な資料を作成する。		①人の意見に流されず、自分の考えをもつ。 ②物事を他人と違う視点で考える。 ③自分の考えを伝えるのに必要な資料を作成する。		
F 発信・伝達力	相手に伝わるように、自分の考えを分かりやすく伝えることができる。	①発表するときは、考えた理由を述べる。 ②考えたことや調べたことを分かりやすい文章で書き表す。	①発表するときは、考えた理由を述べる。 ②考えたことや調べたことを分かりやすい文章で書き表す。 ③相手の反応を確かめながら話をする。 ④自分の考えを、資料を提示しながら説明する。		①発表するときは、考えた理由や客観的な根拠を述べる。 ②考えたことや調べたことを分かりやすい文章で書き表す。 ③相手の反応を確かめながら話をする。 ④発表の時に、言つべきことを整理して話す。 ⑤自分の考えを資料を提示しながら説明する。また、その際に ICT 機器を使う。		

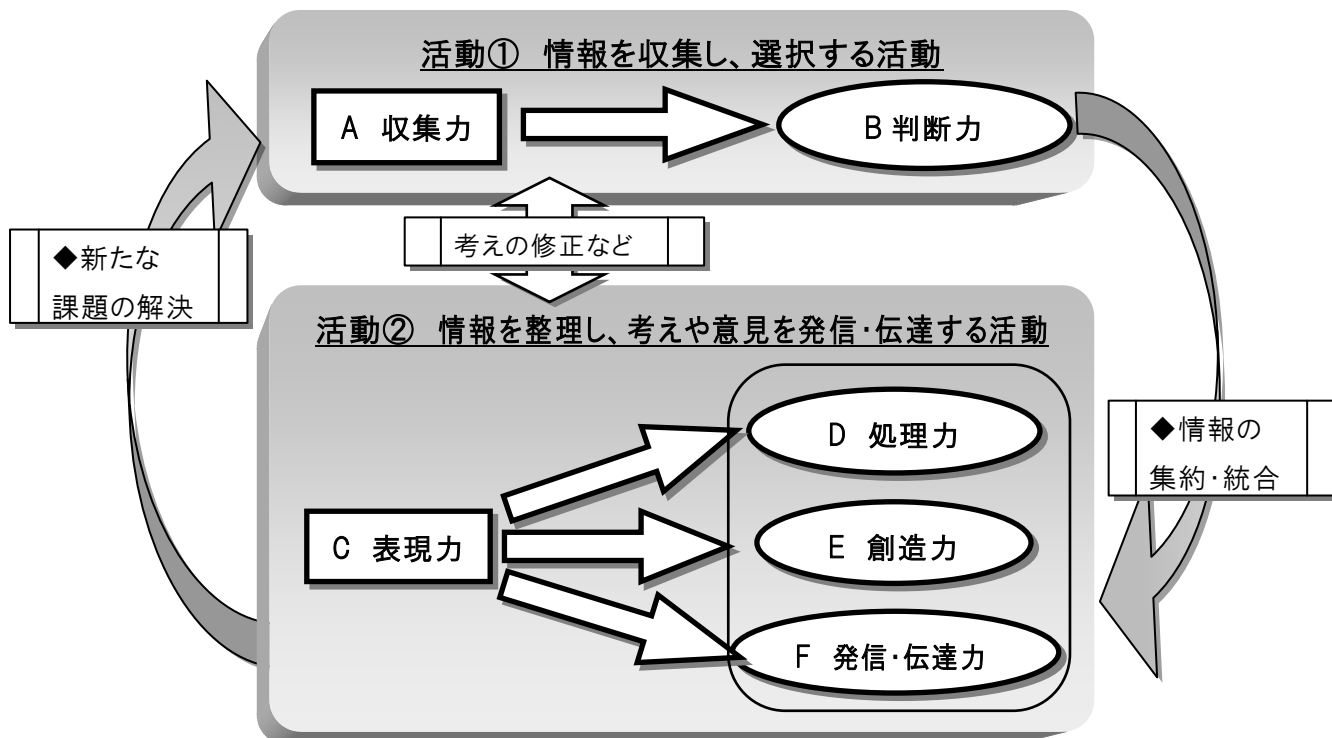
この段階表を作成するにあたり、本市の児童生徒の実態と小・中学校9年間における児童生徒の発達の段階を十分に考慮した。

例えば、「収集力」における「新聞やテレビ、インターネット等の情報媒体を活用する学習活動」は、情報媒体に触れる機会や理解できる語彙が少ない小学校低・中学年の段階では、まだ難しい活動であると考え、小学校高学年以上とした。また、発達の段階が上がるにしたがって、児童生徒の知識や情報の量は増していくので、中学校の段階で自分の考えを発表するときに、主観的なものの見方や言い回しでは、説得力に欠けたり、考えが相手に伝わらなかったりする。そこで、「発信・伝達力」では、小学校高学年以上に、「自分の考えを伝えるときに、考えた理由や客観的な根拠も述べる」ことを意識させる活動や指導が必要であると考えた。

このように、「情報活用の実践力」の各能力を伸ばすのに発達の段階に適した学習活動があり、どの段階でどのような学習活動を行っていくことが効果的であるかを整理した。

(2) 活動モデルの作成・検討

活動モデルの作成においては、「中学生の『情報活用の実践力』における構造モデルの検討」(2008 市原ら)²⁾を参考にした。市原らは、「情報活用の実践力を適切に育成するためには、生徒が各能力を適切に関連付けながら習得できるように、カリキュラムや学習活動を組織する必要がある」とし、「収集力を起点に判断力を育成する学習プロセス」と「表現力を起点に処理力、創造力、発信・伝達力を育成する学習プロセス」という2つの構造をもたせることの重要性を示唆している。そこで、各能力を適切に関連付けながら「情報活用の実践力」が習得できるように、【図3】のような活動モデルを作成した。



【図3】「情報活用の実践力」活動モデル

収集力を起点に判断力を育成する学習プロセスを活動①「情報を収集し、選択する活動」、表現力を起点に処理力、創造力、発信・伝達力を育成する学習プロセスを活動②「情報を整理し、考えや意見を発信・伝達する活動」とし、この2つの活動を基本とした。また、矢印の出発点となっている能力が矢印の到達点の能力を支える関係があるとし、それぞれの活動に応じた手

立てを考えていくようにした。

活動①の収集力が判断力を支える理由は、判断力が「集めた情報から必要な情報を見つける能力」であり、それを高めるためには、「情報を集め、調べることができる能力」である収集力の形成が必要だからである。

活動②の表現力が処理力、創造力、発信・伝達力を支える理由は、処理力、創造力、発信・伝達力が、総じて「整理された情報を分析し、自分の考えをまとめたり、相手に伝えたりする能力」であり、それを高めるためには、「文・図・表などに情報を整理する能力」である表現力の形成が必要だからである。

一単位時間における学習指導過程の流れとしては、活動①の後、得た情報を集約・統合する活動②を行う流れを基本とした。しかし、学習活動において、他者の考えに触れることで、自分の考えを修正する場面もあるので、2つの活動が相互に補完し合うことで、児童生徒の情報活用の実践力は向上すると考えられる。

さらに、学習した内容を理解することで新たな課題が生じる場合がある。その場合は、2つの活動を継続的に繰り返すことで、児童生徒の情報活用の実践力は向上すると考えられる。

3 授業実践

授業では、「情報活用の実践力」の育成を意識して取り組むために、【図4】のように学習指導過程の指導上の留意点に、高めたい能力を明記した。また、作成した『情報活用の実践力』段階表や『情報活用の実践力』活動モデルを授業に位置付け実践するために、学習指導過程に活動モデルの2つの活動を行う場面を太枠で囲み、「情報活用の実践力段階表との関連」の欄を設け、「能力名(記号)－段階－活動番号」を記した。

主な学習内容および学習活動	指導上の留意点	情報活用の実践力段階表との関連
活動② 情報を整理し、考えや意見を発信・伝達する活動		
6 水酸化ナトリウム水溶液に酸を加えていったときの水溶液の変化を考える。	○ 演示実験の水溶液の移り変わりの様子を、モデルカードを用いて再現させる。 (表現力・処理力)	C-中・3年-③

【図4】 学習指導過程の例

(1) 小学校における検証授業

ア 実施学年・教科および単元名 第5学年 理科 「雲と天気の変化」

イ 各活動に応じた主な手立て

活 動	手 立 て
活動①	グループごとにインターネットや新聞などから多くの資料を準備させ、必要な情報を選択させる。
活動②	選択した資料と天気の規則性から、これから雲がどう動くかなどを考えさせ、天気を予想させる。グループで話し合って出た結論を、実物投影機で資料を提示しながら、理由を明確にして発表させる。

ウ 本時の目標

- 天気の変化の規則性や気象情報を基に天気を予想し、表現することができる。
- 天気の変化を予想するための情報を集め、天気とのかかわりを調べることができる。

エ 学習指導過程

主な学習内容及び学習活動	指導上の留意点	情報活用の実践力段階表との関連
<p>1 前時学習を想起する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 天気はおよそ西から東に変化していく。 <p>2 本時の問題を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">わたしたちにも、天気の変化を予想できるのだろうか。</div> <p>3 学習の進め方について話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 天気の変化のきまりを生かし、天気を予想しようという目的をもたせる。 ○ どんなことが分かれば予想できるかを考えさせる。 	 <p><新聞で情報を集める児童></p>
活動① 情報を収集し、選択する活動		
<p>4 グループで予想に必要な資料を集める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ インターネット ○ 新聞 	<ul style="list-style-type: none"> ○ これまでの情報収集活動を生かし、手際よく気象情報を集め、取捨選択させる。 (収集力・判断力) 	<p>A-小・高学年-③ B-小・高学年-①</p>
活動② 情報を整理し、考えや意見を発信・伝達する活動		
<ul style="list-style-type: none"> ○ 集めた情報から、天気の変化を予想する。  <p><情報を整理している児童></p> <p>5 発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 全体で発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 集めた情報を種類ごとに整理させる。 (表現力) ○ 発表するために必要な情報を分析させる。 (処理力) ○ 大きく3枚の写真資料を用意させ、そのことからどう変化していくかを考えさせる。 (処理力) ○ 自分の考えをワークシートにまとめさせる。 (創造力) ○ 実物投影機を使い、これまでの雲の動きを基に、これからどのように変化していくかを説明させる。 (発信・伝達力) 	<p>C-小・高学年-① D-小・高学年-② D-小・高学年-① E-小・高学年-③ F-小・高学年-①⑤</p>
<p>6 まとめをする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">その場所の西の天気や雲の動きを調べることで天気の変化を予想できる。</div>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時では、予想までの過程における思考が重要であることを知らせ、賞賛する。 	 <p><まとめた結果を発表する児童></p>

(2) 中学校における検証授業

ア 実施学年・教科および単元名 第3学年 理科 「酸・アルカリとイオン」




イ 各活動に応じた主な手立て

活動	手立て
活動①	ノートの記録を基に、必要な情報をグループで選択させる。実物投影機を活用した演示実験で得られる情報を収集させ、水溶液の性質と関連付けて観察させる。
活動②	個人やグループでモデルカードの操作活動を行わせ、課題に対する結論を筋道立てて考えさせる。自分たちの考えをワークシートにまとめ、分かりやすく発表させる。

ウ 本時の目標

- 中和と中性の違いについて理解できる。
- 水溶液中に存在するイオンの種類から判断し、中和の様子を、イオンモデルを用いて説明することができる。

エ 学習指導過程

主な学習内容及び学習活動	指導上の留意点	情報活用の実践力段階表との関連
1 アルミ缶とアルカリ性洗剤の反応で起こる事故を知る。 2 水酸化ナトリウムの危険性について確認する。 3 学習課題を確認する。	○ 薬品等の危険性が日常生活の中にもひそんでいることを意識させる。	
どのような処理を加えれば水酸化ナトリウム水溶液を安全に処理できるだろうか。		
活動① 情報を収集し、選択する活動		
4 学習課題について班で予想する。 <u>生徒の予想として</u> ・塩酸を加え中和し、水溶液を中性にする。 理由：中和により塩化ナトリウムと水ができる。 5 演示実験で水溶液の性質の移り変わりを確認する。 <u>演示実験</u> ・水酸化ナトリウム水溶液に塩酸を1滴ずつ加える。 <u>観察の視点</u> ・フェノールフタレイン溶液、BTB溶液の色の变化	○ 何(薬品)をどの程度加えるか必要な情報をノートで調べさせる。(収集力・判断力) ○ 指示薬の色の变化を記録させ、水溶液の性質と関連付けて観察させる。(収集力・判断力) ○ 中和と中性の違いについて確認させる。	<予想を考える生徒> A-中・3年-①② B-中・3年-① A-中・3年-④ B-中・3年-① 
活動② 情報を整理し、考えや意見を発信・伝達する活動		
6 水酸化ナトリウム水溶液に酸を加えていったときの水溶液の変化を考える。 7 発表する。	○ 演示実験の水溶液の移り変わりの様子を、モデルカードを用いて、再現させる。(表現力・処理力) ○ 学習課題を意識したまとめを行い、発表させる。(発信・伝達力)	<モデルカード> C-中・3年-③ D-中・3年-③ C-中・3年-① F-中・3年-①⑤
8 本時の内容をまとめる。 <u>塩酸を加え中和させ、中性にした後に捨てるようにすればよい。</u> 9 酸性化した湖の話聞く。	○ デジタルコンテンツを用いて、学習の定着を図る。 ○ 自然環境保全への意識をもたせる。	 <まとめた結果を発表する生徒>

(3) 授業の成果

ア 小学校での検証授業の成果

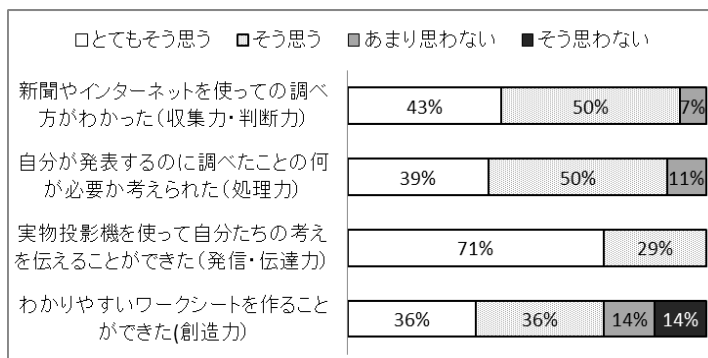
活動①では、【図5】のように、インターネットや新聞で集めた気象情報を基に、天気の変化を予想するために必要な情報を選択していた。児童は、「雲の量が分からないといけない」、「雨の量が分かるとくもりか雨の天気の違いが分かる」などと話し合っていた。



【図5】インターネットで情報を収集する児童

活動②では、収集した情報と天気の規則性から、明日の天気を予想させた。児童は、これから雲がどう動くのか、アメダスの資料と雲の動きを関連付けて、自分の考えをもち、グループで話し合っていた。その後、話し合っただけで結論を、視覚的に伝えるために実物投影機を使い説明した。児童は、作成した資料を基に理由を入れて説明したり、それに対して具体的に質問したりする姿が見られた。

学習後の児童の意識調査を分析すると、【図6】のように、実物投影機を活用して自分たちの考えを伝えることができたと思っている児童が多いことが分かる。このことから、多くの情報を取捨選択させる活動と発表するのに必要な情報を分析させる活動が、自分の考えを発信・伝達することにつながったといえる。分かりやすいワークシートを作成することについてはまだ不十分なので、「表現力→創造力」の活動の手立てを考えていく必要がある。



【図6】 授業後の意識調査結果 (小学校)

イ 中学校での検証授業の成果

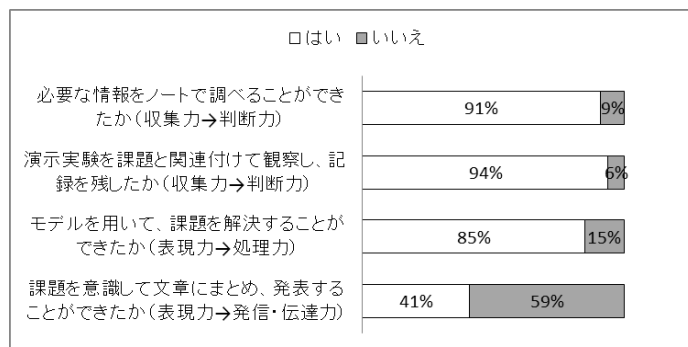
活動①では、【図7】のように、学習課題に対する予想に必要な情報を記録ノートで過去の授業を振り返りながら調べていた。既習事項を課題と照らし合わせ、塩酸と水酸化ナトリウム水溶液を混ぜたときの変化などの情報をノートの記録から収集することができた。さらに、それが課題解決に必要な情報かどうかグループで意見を交わしながら整理し、ホワイトボードに予想を書くことができた。また、塩酸と水酸化ナトリウム水溶液を混ぜる演示実験では、画面に映る水溶液の変化を自分たちの予想と照らし合わせながら観察・記録していた。



【図7】 ノートを基に意見を述べ合う生徒

活動②では、水酸化ナトリウム水溶液に塩酸を加えたときのイオンの様子をモデルで再現しながらグループで活発に意見交換をしていた。演示実験の様子とモデルカードの操作によるイオンの動きとを関連付けながら、水溶液の変化の様子を筋道立てて考えていた。この活動でも、記録ノートを取り出し、自分の考え方が本当に正しいかどうか確認する姿があった。

学習後の生徒の意識調査を分析すると、【図8】のように、必要な情報を記録ノートで調べたり、演示実験の様子とモデルカードの操作とを関連付けて考えたりすることができた生徒が多いことが分かる。得られた情報を基に、モデルカードを用いた活動が効果的であり、課題の解決につながったといえる。解決したことから課題を意識して文章にまとめ、発表することについては不十分であり、「表現力→発信・伝達力」の活動の手立てを考えていく必要がある。



【図8】 授業後の意識調査結果 (中学校)

Ⅶ 研究の成果と課題

1 研究の成果

【図9】のように、情報活用の実践力について、児童生徒に意識調査（対象：検証授業学級 62 名、実施時期：9 月、12 月）を行った。9 月と12 月の結果を比べると、全体的に肯定的な回答が増え、情報を選択する「判断力」、整理する「表現力」、考えを発信・伝達する「発信・伝達力」、それぞれが伸びていることが分かる。特に、「表現力」は、66%から 78%と大きく伸びている。この意識調査の結果は、活動①、活動②のそれぞれの流れを意識した学習活動を児童生徒に繰り返し取り組ませてきた成果といえる。

このように、段階表や活動モデルを学習指導過程に位置付け、「情報活用の実践力」を意識した学習活動に取り組み、その学習活動に応じた手立てを講じたことで、情報を適切に選択・整理し、自分の考えを発信・伝達する児童生徒を育成することができたと考える。

2 研究の課題

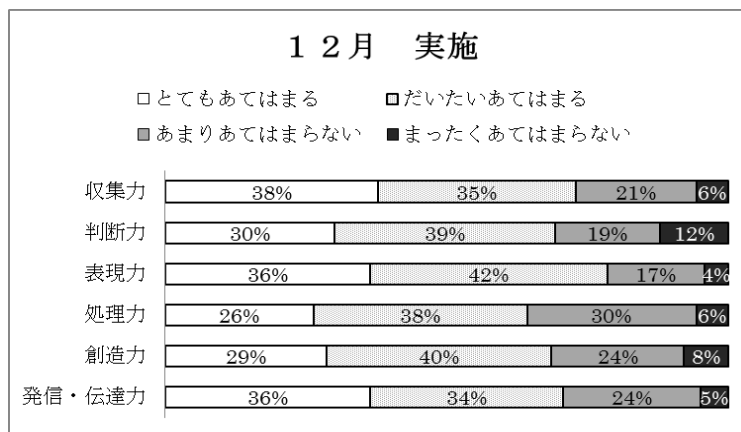
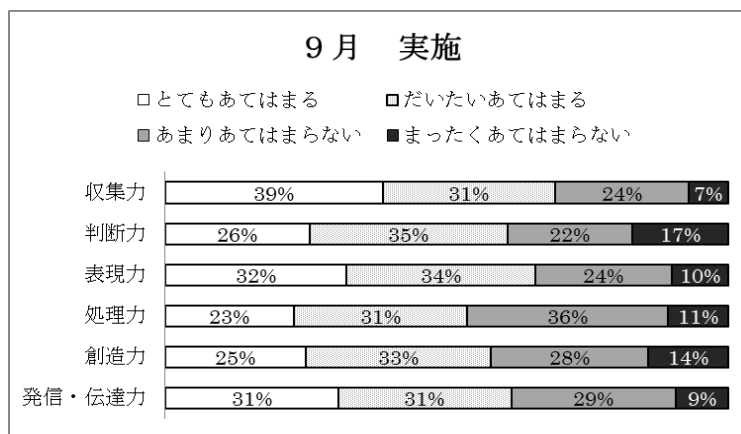
今後は、さらに段階表や活動モデルの活用の在り方を工夫・改善し、小・中学校9年間ににおける児童生徒の発達の段階に応じたつながりのある学習指導を行っていく必要がある。特に、活動モデルにおける「情報活用の実践力」の各能力の育成の在り方をさらに研究をしていくことが大切である。

<引用・参考文献>

- 「小学校学習指導要領」解説 理科編 文部科学省
 「中学校学習指導要領」解説 理科編 文部科学省
 「教育の情報化に関する手引き」 文部科学省
 「教育の情報化ビジョン～21世紀にふさわしい学びと学校の創造を目指して～」文部科学省
 1) 「情報活用の実践力尺度の作成と信頼性及び妥当性の検討」
 1999 日本心理学第 63 回大会発表論文集 高比良ら
 2) 「中学生の『情報活用の実践力』における構造モデルの検討」
 2008 日本教育工学会論文誌 市原ら

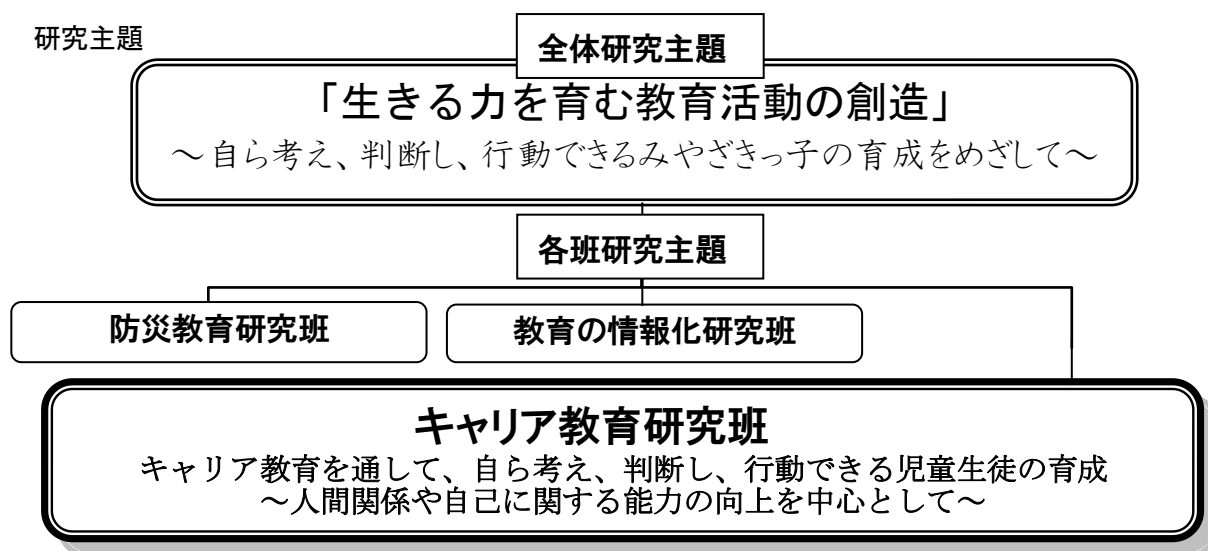
<研究同人>

所長	有村 政美		
指導主事	黒木 修志		
研究員	横山 登 (櫛小学校)	岩切 美弥 (生目南中学校)	
	堀川 貴史 (木花小学校)	日高 純司 (広瀬中学校)	
	後藤 智美 (櫛北小学校)	川添 卓哉 (生目台中学校)	



【図9】児童生徒の意識の変容

I 研究主題



II 主題設定の理由

21世紀の知識基盤社会においては、生きる力を支える「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の調和のとれた児童生徒の育成が求められている。さらに、教科等を横断して改善すべき事項として、情報教育、キャリア教育、安全教育などがあげられている。

また本市においては、「宮崎で育ち、学ぶことを通して、郷土に誇りと愛着を持つ感性豊かな子どもたちの育成」を「目指すべき姿」として、「宮崎市教育ビジョン」が策定され、その中で、確かな学力やキャリア教育等の充実が求められている。また、東日本大震災の教訓や日向灘域の地震の活動化を受け、本年度より市内の小中学校に新たに防災主任を置いた。さらに、本年度中に、市内すべての小中学校のコンピュータを入れ替え、教育の情報化のさらなる推進に努めているところである。

これらの社会や宮崎市の状況を踏まえ、本研究班においては、宮崎市の子どもたちが、自分のよさや可能性などに気付き、自らの将来を考え、自分らしい生き方を実現していこうとする態度を育成するキャリア教育の指導の在り方について、2か年計画で研究を進めることとした。

初年度である本年度は、キャリア教育において育成すべき能力である「基礎的・汎用的能力」の4つの能力の中でも、小中学校における日常の教育活動において特に重要であり、人間としてより根底をなす能力である「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」の2つに焦点を絞って指導計画を立て、研究を進めていくことが必要であると考えた。

そこで、本年度は、教育活動全体におけるキャリア教育の視点を明確にしたシラバスを作成し、視点を体系化した授業の在り方についての研究を行い、人間関係や自己に関する能力を育成したいと考える。

このことにより、全体の研究主題である『「生きる力を育む教育活動の創造」～自ら考え、判断し、行動できるみやぎっ子の育成をめざして～』に迫ることができるであろうと考え、本主題を設定した。

III 研究目標

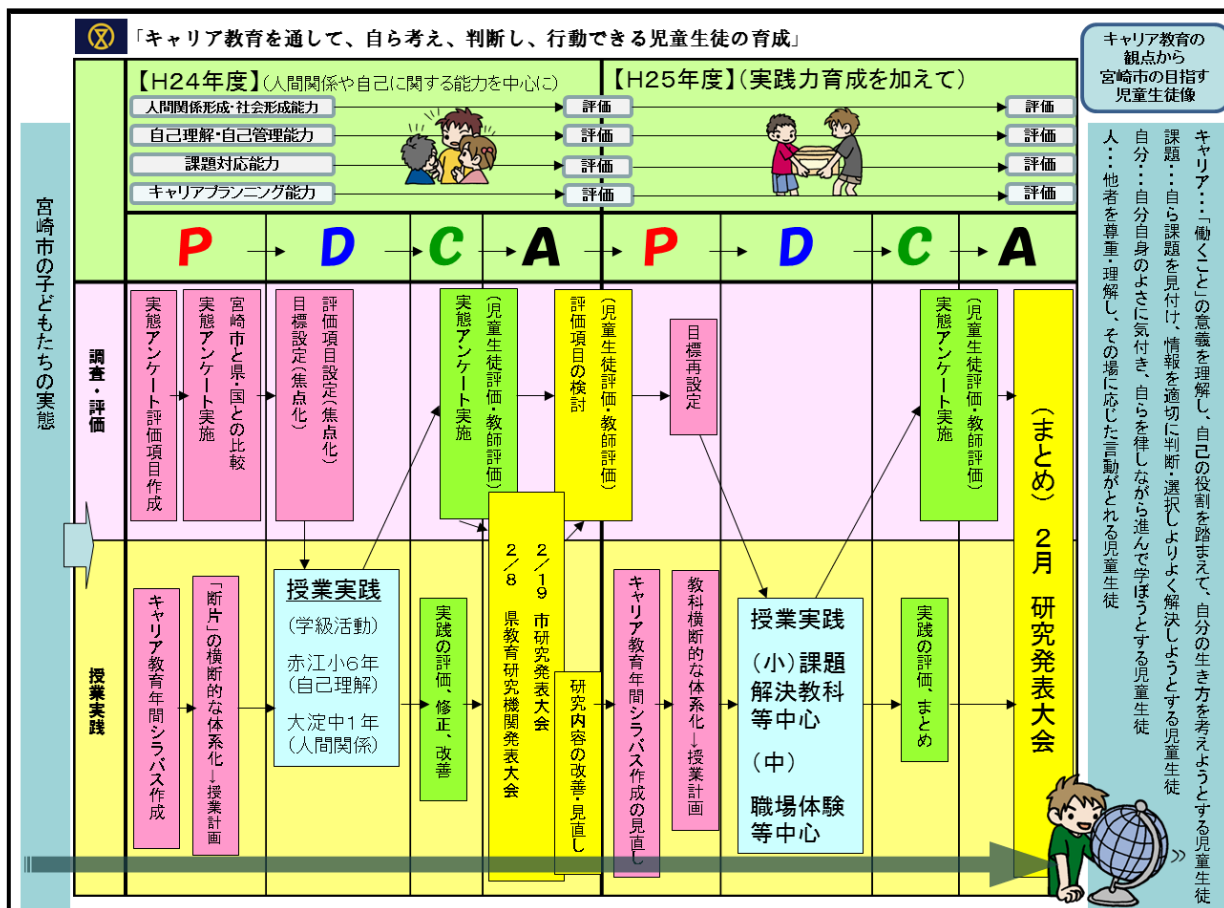
キャリア教育を通して身に付けさせたい「基礎的・汎用的能力」を育成するために、教育活動全体におけるキャリア教育の視点のもち方や、視点を体系化した授業等の在り方を実践的に究明する。

IV 研究仮説

教育活動全体におけるキャリア教育の視点を明確にしたシラバスを作成し、授業を計画・実践すれば、「基礎的・汎用的能力」を身に付けた児童生徒を育成することができるであろう。

V 研究構想及び研究計画

本研究の構想及び計画をまとめると、【図1】のようになる。



【図1 研究構想及び研究計画】

VI 研究の実際

1 キャリア教育の捉え方 (理論研究より)

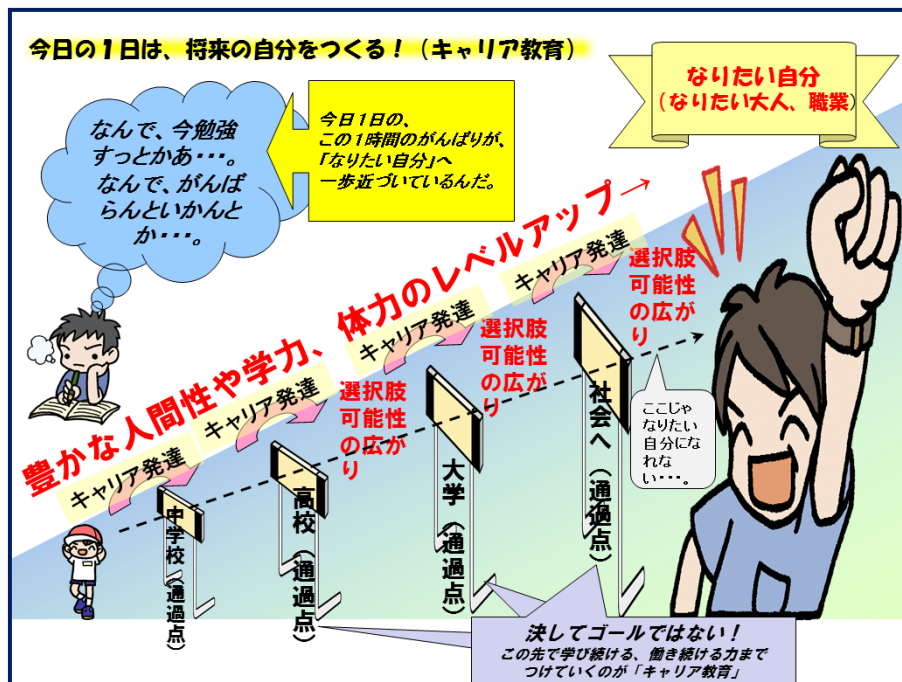
(1) キャリア教育とは

キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義されている〔注1〕。キャリア発達とは、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程のこと」である〔注2〕。

近年、「7・5・3現象」で代表されるような若者の早期離職や、フリーター志向の拡大、ニート(若年無業者)が社会問題化している中で、各学校段階において、自分らしい生き方を実現していこうとするキャリア発達を促す手立てが必要である。

例えば、豊かな人間性や学力、体力の日々のレベルアップが、自分の将来の選択肢や可能性を広げ「なりたい自分」へ一歩ずつ近づいていること、高校や大学等に入ることがゴールではなく通過点であり、学び続ける力や働き続ける力をいつまでも身に付けていくこと、な

どの構想を根拠にした教育活動を展開していくことで、子どもたちのキャリア発達を促すことができる【図2】。また、教師が【図2】のようなイメージをもって子どもたちに常に語りかけていくことで、将来の目標実現のために「学びたい」という意欲を高めることができる【図2】。また、教師が【図2】のようなイメージをもって子どもたちに常に語りかけていくことで、将来の目標



【図2 キャリア教育のイメージ】

実現のために「学びたい」という意欲を高めることができる【図2】。そのため、小学校段階から組織的・系統的なキャリア教育の充実を図ることが重要である。

(2) 「基礎的・汎用的能力」とは

キャリア教育で身に付けさせたい能力である「基礎的・汎用的能力」は、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの能力によって構成される【表1】。中教審のまとめでは「以上の4つの能力は、独立したのではなく、相互に関連・依存した関係である。順序があるものでもなく、これらの能力をすべての者が同じ程度あるいは均一に身に付けることを求めるものではない。」と記されている【注3】。

【表1 基礎的・汎用的能力】

①	人間関係形成・社会形成能力 多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の立場を正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる能力
②	自己理解・自己管理能力 自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする能力
③	課題対応能力 仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる能力
④	キャリアプランニング能力 「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関係を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく能力

以上のような、理論研究や文部科学省の藤田調査官の講話をもとに協議を重ね、児童生徒の実態や傾向を把握した上で、キャリア教育の視点を明らかにした指導の工夫や授業づくりについて研究を進めることとした。

2 児童生徒の実態と目標設定

まず、児童生徒の「基礎的・汎用的能力」に関する実態を把握するため、「みやざき学力・意識調査(小5・中2)」の結果を基に、研究員の所属する学校と県との比較を行った【表2】。

【表2 みやざき学力・意識調査】 ※対象：研究員が所属する小学校3校の5年生413名、研究員が所属する中学校3校の2年生610名 単位：%

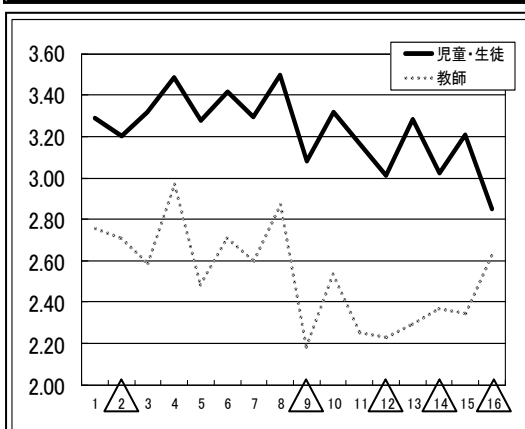
	質問内容	小学校3校	県	県との比較	中学校3校	県	県との比較
1	将来の夢や目標がある。	88.8	89.3	-0.5	78.7	74.3	+4.4
2	人の気持ちがわかる人間になりたい。	88.5	90.2	-1.7	95.2	92.7	+2.5
3	人の役に立つ人間になりたい。	92.2	93.0	-0.8	96.2	93.5	+2.7
4	自分には良いところがある。	79.5	78.1	+1.4	64.3	63.6	+0.7

対象校の傾向として、小学校では、夢や目標をもつ、人の気持ちを理解したい、役に立ちたいという項目は、県平均と比較するとわずかに下回っている。中学校では、全項目において県平均よりも高いが、「自分には良いところがある」という項目については他と比較すると低くなっている。このことから、自己肯定感を高めるための取組を行う必要性が分かる。

次に、キャリア教育の手引きを参考にしてアンケートを作成し、研究員の所属する学年の児童生徒及び教師を対象に実施した【表3】。

【表3 アンケート調査項目】 ※対象：小学校3・5・6年 406名、中学校1・2・3年 514名、教師41名

人間関係形成・社会形成能力	1	人と接するとき、相手の気持ちを考えていますか。	課題対応能力	9	分からないことやもっと知りたいことがある時、自分から進んで資料や情報を集めたり、だれかに質問したりしていますか。
	2	相手が分かりやすいように工夫しながら、自分の考えや気持ちを伝えていますか。		10	同じ失敗をくり返さないために、その後の行動に気をつけていますか。
	3	場や相手に応じた声の大きさや言葉遣いで話をしていますか。		11	何かをする時に計画を立てたり、よりよい方法を考えたりしていますか。
	4	自分から進んであいさつをしたり会釈をしたりしていますか。	キャリアプランニング能力	12	「なぜ働くのか」考えていますか。
	5	班活動や係、委員会活動などで、自分から役割や仕事を見つけて活動していますか。		13	今、学んでいることが、将来の自分につながっていると考えていますか。
	6	班活動や係、委員会活動などで、友達と仕事を分担しながら、友達と力を合わせて活動していますか。		14	学校や学級、家庭や地域の中での、自分の役割について考えていますか。
自己管理・理解能力	7	気持ちが進まないことや苦手なことでも、やるべきことには取り組んでいますか。		15	自分の将来の目標に向かって努力したり、生活や勉強のしかたを工夫したりしていますか。
	8	自分の当番や係の仕事を、責任を持ってしていますか。	自己	16	自分の良いところを3つ以上あげることができますか。



※4点~いつも考えている、3点~時々考えている、2点~あまり考えていない、1点~まったく考えていない、の4段階で答えた結果の平均である。対象は、小学校、中学校それぞれ3校の児童生徒及び教師である。

【図3】は【表3】のアンケートの調査結果である。児童生徒、教師共に挨拶や会釈などの礼儀、当番や係活動は比較的好くできていると考えていることがわかる。しかし、児童生徒の評価を見ると、△印にあるように、相手意識をもった自己表現、自分から進んで調べようとする態度、「なぜ働くのか」という勤労観・職業観の確立、自己肯定感の低さが課題として浮かび上がった。また、場や相手に応じた声の大きさや言葉遣い、自己肯定感については、教師と児童生徒の意識に差が見られた。

そこで、アンケートの結果と日常の児童生徒の観察から、【表4】のような「基礎的・汎用的能力」ごとに目指す児童生徒像を設定した。

【図3 アンケート調査結果(7月)】

【表4 目指す児童生徒像】

基礎的・汎用的能力	目指す児童生徒像
人間関係形成・社会形成能力	他者を尊重・理解し、その場に応じた言動がとれる児童生徒
自己理解・自己管理能力	自分自身のよさに気付き、自らを律しながら進んで学ぼうとする児童生徒
課題対応能力	自ら課題を見付け、情報を適切に判断・選択しよりよく解決しようとする児童生徒
キャリアプランニング能力	「働くこと」の意義を理解し、自己の役割を踏まえて、自分の生き方を考えようとする児童生徒

3 キャリア教育のシラバス

各学校においてキャリア教育の指導は行われているが、活動が単発であったり、学習したことがその後の日常生活に生かされていないといった現状がある。

そこで、「特別活動」や「総合的な学習の時間」「道徳の時間」「各教科」「日常生活」といったあらゆる教育活動の中で、教師がキャリア教育の視点を明確にし、各々の教育活動を関連させて指導していくために、年間指導計画を基にキャリア教育のシラバスを作成した【表5】。また、キャリア教育を通して身に付けさせたい「基礎的・汎用的能力」の分類番号(①人間関係形成・社会形成能力 ②自己理解・自己管理能力 ③課題対応能力 ④キャリアプランニング能力)を示すことで、教師が教育活動と「基礎的・汎用的能力」の関連性を意識し、体系的に指導ができるようにした。

【表5 キャリア教育のシラバス(赤江小6年)】

赤江小学校 6年生 H24キャリア教育		10月	11月	12月	1月	2月	
学校行事	4月 始業式 入学式 一年生を歓迎する会①	5月 交通教室 春の遠足 プール清掃 観劇教室	終業式 始業式	修学旅行 就学時検診 研究公開	持久走大会 中学校説明会④	CRTテスト 地区児童会	戦争と平和③
委員会活動	委員会活動①②	委員会活動	委員会活動	委員会活動	委員会活動	委員会活動	

学級活動	6年生になって② 係の活動を決めよう② 気持ちのよい挨拶と返事①	交通安全 話し合い	命① 自分を見つける② 話し合い	図書館の利用と働き③ 仕事の尊さ② 性の情報	話し合い 話し合い 話し合い	話し合い 話し合い 話し合い	
総合	インターネットとの出会い③	dream on 赤江 掩体壕・特攻慰霊碑の見学 オリエンテーション	赤江のなごみ dream on 赤江 赤江を見つけるなごみ そう 戦争体験者の話を聞こう	dream on 赤江 赤江を見つけるなごみ そう 知覧での学びをまよめよう 思いでつくりよう修学旅行	dream on 赤江 赤江を見つけるなごみ そう 自分たちができることを考えよう 戦争と平和劇上演に向けて	dream on 赤江 赤江を見つけるなごみ そう 自分たちができることを考えよう 戦争と平和劇上演に向けて	dream on 赤江 赤江を見つけるなごみ そう 自分たちができることを考えよう 戦争と平和劇上演に向けて
道徳	見送られた20球(松井秀喜)② 熊田千賀慕 頂上はすぐそこに わたしはわたしらしく②	よみがえれ海よ「わかっているよ」② わたしはわたしらしく②	出で 千年の瓦を作る 海の勇者 班長になったら② やっぱり気になるマリーキュリー 太平洋のかけはし	出で 絶望の中で見つけた光③ 米百俵 私たちの小さな駅	話し合い 話し合い 話し合い	話し合い 話し合い 話し合い	
生活	相手の真意を聞き取り	相手の真意を聞き取り	生活の中の教訓	日々の生活の理	感謝の気持ちを伝	自分の一日を紹介	

主日活動	日直(週直) ①②	給食指導・清掃指導①②	休み時間の集団の中での人間関係①
キャリア教育を通して身に付けさせたい			
形成能力、②自己理解・自己管理能力、③課題対応能力、④キャリアプランニング能力			

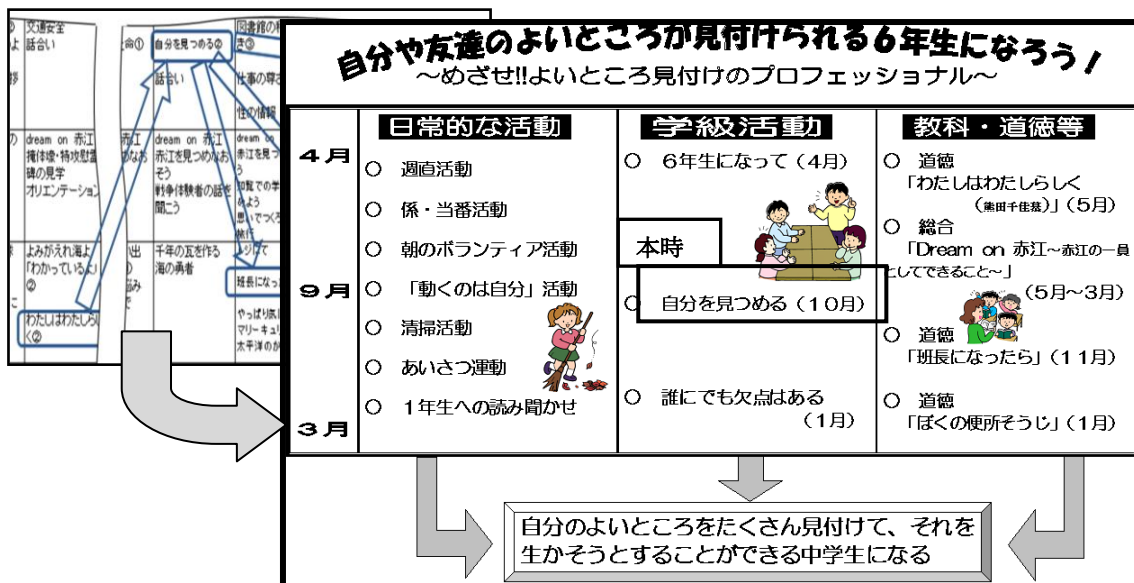
4 キャリア教育の視点を踏まえた授業づくり

(1) 「自己理解・自己管理能力」育成の授業づくり

ア 「キャリアデザイン」

児童生徒にとって、今学習していることを日常生活にどう生かすか、将来の自分にどのようなつながっていくのか、というイメージを具体的にもつことは大切である。

そこで、今の学習活動が、過去や未来の学習活動とどうつながっているのか、また、学習したことを、今後どの場面で生かすことができるのか等の見通しがもてるようにするために、キャリア教育のシラバスから、身に付けさせたい能力を絞り込んで重点的に指導するための「キャリアデザイン」を作成し、拡大して教室に掲示した【図4の右】。



【図4 シラバスから作成したキャリアデザインのモデル(赤江小6年)】

イ 授業の実際

赤江小学校第6学年 「学級活動」 自分のよいところを知ろう




(ア) 授業のねらい及びポイント

本学級には、自分のよさが見つけられない自己肯定感の低い児童が数名いる。また、積極的に自分の気持ちを表現することに苦手意識をもつ児童もいる。これから中学生という多感な時期を迎える児童にとって、自分自身の姿や日頃の行いについて振り返りながら自分自身を見つめたり、友達のよさを見つけたりする学習活動を行うことは、「自己理解・自己管理能力」を高め、自己肯定感をもたせることにつながる。と考える。

本時は、自分や友達の頑張り、努力に気付かせ、自他を認める態度を育て、自己肯定感を高めるために、事前に作成した「よいところみつけカード」を活用した。また、自分自身のよさや頑張りを認識させ、卒業までの見通しをもって活動する意欲をもたせるために、周りの人からの「ビデオレター」や中学校教諭の話聞く場を設定した。

(イ) 学習指導過程

展開	学習内容及び学習活動	○指導上の留意点・評価・☆児童の様子	資料・準備
導入	1 これまでの生活を振り返り、話し合う。 学校生活の様々な場面の写真を提示し、これまでの自分や友達との関わりについて振り返る。	○ 様々な行事や委員会活動、学級での生活などの場面で、これまでの自分を振り返らせる。	行事や学校生活の写真
5分	2 めあてを把握する。 自分のよいところをたくさんみつけよう。 ～めざせ!よいところみつけのプロ～	☆ 運動会・授業中・ボランティア・係活動・一年生の給食当番・春の遠足等の写真で振り返りをした。懐かしむと共に、その行事や学習を通して頑張ったところを考えて発表し、本時のめあてにつなげた。	

展開 35分	3 自分や友達のよさや「頑張ったところ」「努力していること」をみつけて話し合う。 ○ よいところみつけカードをもとに考える。 ○ ビデオレターを見て考える。	○ これまでに友達がみつけてくれたよさやよいところみつけカードをもとに考えさせるようにする。 ○ 「よいところみつけカード」をもとに、自分でも分かっているよさや他人から見たよさを分類することで自分でも気付いていない意外なよさについても気付かせるようにする。 ☆ 児童は、友達が事前に書いた「よいところみつけカード」を見るのを楽しみにしており、配られたら笑顔で読んでいた。	よいところみつけカード
	4 「よいところみつけ」をして気付いたことについて話し合い、発表する。 ○ 自分の考えるよさと他人から見たよさとの違いや新たなよさに気付かせる。 5 中学校の先生からの「こんな中学生になってほしい」というメッセージを聞く。	○ 自分が考える姿と他人から見た自分の姿の違いに気付かせたり、よさにたくさん触れさせたりする。 ☆ 他人から見られているという意識が芽生え、今後の自分の生活ではよさを生かしていきたいという気持ちが出てきた。 ○ 中学校の先生の、「自分のよさをたくさん知ってそれを生かそうとする意欲的な中学生になって欲しい」というメッセージを聞き、互いのよさを認め、生かしながら卒業までの半年を大切に過ごしていくことを確認し見通しをもたせる。 ☆ これから進学する子ども達にとって中学校の先生のお話は関心があり、興味深く聞いた。	  <p>自分で思っているところと違うなあ。意外だった・・・。なんだか嬉しいな。</p>
終末 5分	6 本時の学習を振り返り、感想やこれから頑張っていこうと思ったことを書く。	【評価】互いのよさを認め、生かしながら卒業までの半年を大切に過ごしていこうとする気持ちをもつことができる。(ワークシート・観察) ☆ 自分のよさに気付いて、今後を見通す児童が出てきた。	ワークシート
	 <p>「笑顔」「挨拶」を大切に、頑張って、入学してきてくださいね。楽しみに待っていますよ。</p> <p>自分のよいところを知ることができて嬉しかった。これからはもっともっと増やしていきたい。</p>		

(ウ) 児童の感想

「ビデオレターを見て、先生方や1年生にも6年生のよいところをみつけてもらえ、こんなにうれしいことはないと思いました。」「自分が思っているより友達がよいところをたくさん書いてくれて、正直びっくりしました。」「たくさんがんばりをほめてもらったので、これからはもっとしっかりした目標をもって頑張っていきたいと思いました。」

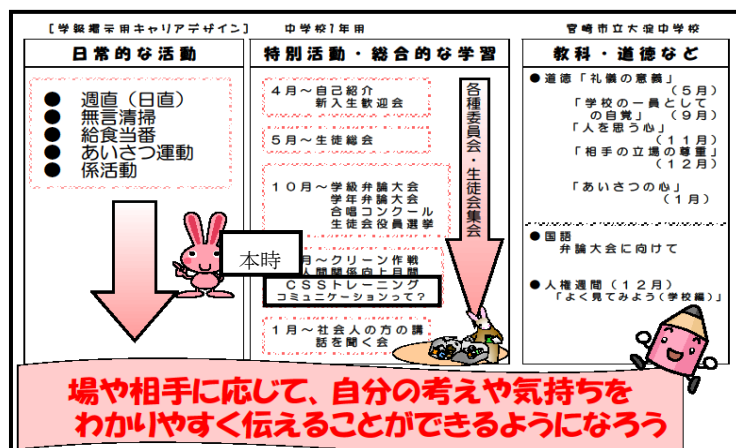
(エ) 考察

本時で「よいところみつけカード」やビデオレターを活用したことで、自己肯定感の低い児童にも自分のよさに気付かせることができた。また、展開後段で、中学校教諭の話を書くことが、中学校での自分の姿を意識することにつながった。さらに「よいところみつけ」を帰りの会等で継続することで、互いのよさにも気付かせることができた。また、「キャリアデザイン」を意識して11月の道徳を実践することで、その後の修学旅行での役割を自ら進んで行う場面も見られた。

(1) 「人間関係形成・社会形成能力」育成の授業づくり

ア 「キャリアデザイン」

前述の小学校の授業を受けて「キャリアデザイン」をより意識するために、生徒一人一人が手元において毎日確認できるよう工夫した【図5】。



【図5】 キャリアデザインのモデル (大淀中1年)

イ 授業の実際

大淀中学校第1学年「学級活動」

コミュニケーションって何だろう～一方向双方通行のコミュニケーション～

(ア) 授業のねらい及びポイント

本学級は、「hyper-QU」の結果によると、ソーシャルスキルが不十分であると認められる生徒が多く、些細なことからトラブルに発展することがある。そこで、ソーシャルスキルを高めることをねらいとした授業を設定した。

まず、事前指導として、11月を「人間関係向上月間」と位置付け、個人目標をたて、毎週のCSS（クラスルーム・ソーシャル・スキル）目標も「かかわりのスキル」に重点を置いて指導を行った。本時では、一方方向と双方向のコミュニケーション体験と、台詞カードと感情カードを使った活動を取り入れ、コミュニケーションのコツを意識させた。終末段階では個々の手元にある「キャリアデザイン」を確認させた後CSS目標を立てさせ、1週間実践・評価し、12月の人権学習につなげた。

(イ) 学習指導過程

展開	学習内容及び学習活動	指導上の留意点 ☆生徒の様子	資料・準備
導入 10分	1 今までの生活の中で、自分の伝えたいことがうまく相手に伝わらなかった体験を思い出す。 2 本時のねらいを知る。 相手に自分の意見を伝えるとき大切なことは何か考える。 3 学習の進め方を確認する。	○ 簡単に想起させるだけにとどめる。 ○ 本時の学習のねらいを明確にすることで 授業に対する意欲を高める。 ☆ 11月が学級の「人間関係向上月間」であることを確認し、本時のねらいにつなげた。	
展開 I 15分	4 話し手が一方方向のコミュニケーションで情報を伝える。 5 話し手と聞き手が双方向のコミュニケーションで情報を伝える。 ・1回目と同じように話し手が伝える図形をワークシートに描いていく。 6 もとの図形と聞き手が描いた図形を比べ、どのくらい正確に描けたか確認する。 話し手、聞き手の双方の感想を聞く	○ 話し手と聞き手のあいだには仕切りを作り、お互いの様子がわからないようにする。 どうすればうまく伝えられるか難しいな…でも仕切りがあった1回目よりはうまくいきそう… ☆ 話し手も聞き手もお互いに真剣に、コミュニケーションをとろうと努力していた。2回目はジェスチャーを交え、より正確に伝えるよう努力していた。 相手の表情が見えないだけで、うまく伝わらないと思いました。	図形A ワークシート  図形B ワークシート
展開 II 20分	7 上手にコミュニケーションを取り合うコツについてを考える。 ・お互いに質問したり、相づちを打ったりする。 ・表情を豊かにする。 ・気持ちを込め、相手の気持ちを受け止める。 8 コミュニケーションのコツを意識しながら練習をする。	 「うれしそうに」はわかりやすいけど、「困って」と「つらそうに」は違いが難しい… ☆ 3種類の台詞を「うれしそうに」「悲しそうに」等五つの感情を込めて読み分け、カードを出し合う活動に興味をもって、意欲的に取り組んだ。	台詞カード 感情カード
終末 10分	9 本時の活動を振り返る。 10 本時で学んだことをもとに今週のチャレンジカードの目標をたてる。 今日の学習は、こういう力につながって行くのか…今週の目標は何にしようかな	○ 今日の活動が、自分の進路を自ら切り開く力の土台になることを意識させる。 ☆ 本時の学習が、自分の将来に大切な力につながることに気づき、目標を意識して動しようとする意欲が出てきた。 キャリアデザイン	

(ウ) 生徒の感想

「コミュニケーション体験をして、課題ができなかったもので、日頃もやっていないんだなということを感じました。」「感情を伝えるのがこんなに難しいことだったとは思っていませんでした。表情がないとわからない、一方的に言うのと伝わらずに終わることが

とても勉強になりました。」「今日はいいい経験ができました。この経験を生かして、人生で人と仲良くコミュニケーションがとれるよう頑張っていきたいと思います。誤解されるときもあるので、気を付けていきたいと思います。(話し手を体験した生徒)」

(エ) 考察

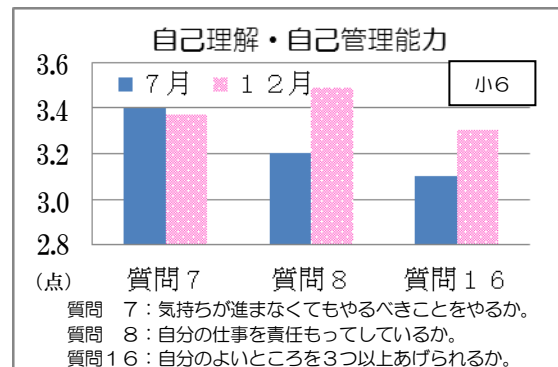
本時のスキルトレーニングは、生徒にとって初めてで難しい課題であったが、意欲的に取り組み、相手を意識したコミュニケーションのためのコツを普段の生活に生かしていこうという意欲をもたせることができた。また、「キャリアデザイン」をもとにチャレンジカードを活用したことで、日常的にスキル向上を意識させることができた。

5 児童生徒の変容

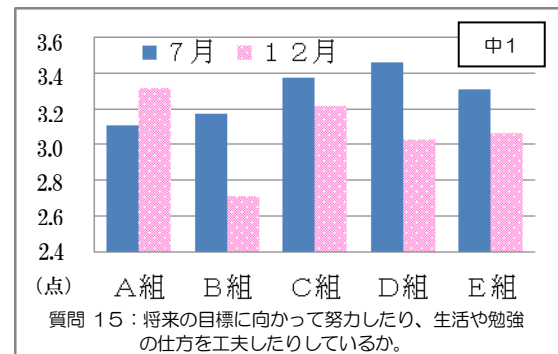
【表3】のアンケートを12月に再び実施し、児童生徒の変容を調べた。その結果、「自己理解・自己管理能力」の育成を中心に授業を行った小学校の学級では、平均が3.23点から3.38点に上がった【図6】。質問16の自分のよいところを挙げる項目では、3つ以上挙げたり短時間で書き出したりする児童生徒が増えた。内容も自分の得意なことから他者との関わりに及んだものにも変わった。このことから、自己理解が深まると共に、人間関係に関する能力も高まったと考えられる。また、「人間関係形成・社会形成能力」の育成を中心に授業を行った中学校の学級では、人間関係形成に関わる項目の平均が3.21点から3.31点に上がった。

「キャリアデザイン」を作成し生徒に提示した学級(【図7】のA組)は、「自分の将来に向かって努力したり、生活や勉強の仕方を工夫したりしていますか」の項目が他学級より大きく上がった。「キャリアデザイン」を活用することで、近い将来を含めた、先を見通す意識が高まったのではないかと考えられる。

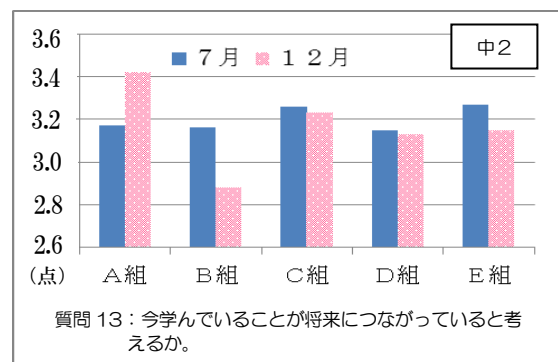
また、中学2年生では職場体験学習を行ったにもかかわらず、「今学んでいることが、将来の自分につながっていると考えていますか」の項目が全体的に見ると下がるという予想外の結果になった。しかし、学級ごとに見ると、担任がキャリア教育の視点をもって指導を続けたA組では上がっている【図8】。このことから、キャリアデザインを活用して、系統的な指導を継続していくことが重要であるということがわかった。



【図6 アンケート結果(自己理解・自己管理能力)】



【図7 アンケート結果(「キャリアデザイン」活用(差))】



【図8 アンケート結果(教師の意識による差)】

VII 成果と課題

1 研究の成果

今年度はキャリア教育のシラバスや「キャリアデザイン」を作成し、「自己理解・自己管理能力」や「人間関係形成・社会形成能力」に関する指導を体系的に行った。その結果、事後の児童生徒のアンケートから「自己理解」と「人間関係形成」に関する能力の高まっていることがわかった。自分のよいところを挙げる記述についても、他者との関わりについての内容が増えた。また、教師や児童生徒の感想等を見ても、相手意識をもった自己表現、場に応じた言動をとろうとする意識の向上がうかがえた。「自己理解」についての能力を高める手立てを継続的に行ってきたことで、児童生徒が自分のよさに気づき、集団の中でそのよさを生かそうとする姿も見られた。

さらに、教師がキャリア教育の視点をもって、日常の指導や授業等を体系的に行うことにより、児童生徒、教師共に学習活動の見通しをもてるようになり、キャリア教育に対する意識が高まった。

このことから、本研究がねらった小中学校におけるキャリア教育が目指す能力の基盤づくりという点では、「基礎的・汎用的能力」を身に付けた児童生徒の育成が図られたと言える。

2 研究の課題

キャリア教育のシラバスを作成したことにより、各教科等の関連を図った指導を行うことができるようになったが、さらにキャリア教育を効果的に進めるために、目標となる活動に向けて関連のある学習内容を同時期に計画するなど、単元配列等を工夫したシラバス（キャリア教育指導計画）を作成することが重要である。

また、宮崎市の子どもたちのキャリア発達を促すために、本研究の取組を市内の小中学校にどのように広げていくかという手立てを考えていく必要がある。

引用・参考文献

「小学校キャリア教育の手引き」（文部科学省 平成22年1月）

「キャリア教育のススメ」（国立教育政策研究所 平成22年4月）

「キャリア教育を創る」（国立教育政策研究所 平成23年11月）

「今ある教育活動を生かしたキャリア教育」（国立教育政策研究所 平成24年8月）

〔注1、2、3〕「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」

（中央教育審議会 平成23年1月）

研究同人

所長 有村 政美

主幹 吉牟田浩一

研究員 濱崎かおり（宮崎市立赤江小学校） 野口 晶子（宮崎市立大淀中学校）

日野 浩二（宮崎市立住吉小学校） 吉本 真紀（宮崎市立住吉中学校）

田中 洋貴（宮崎市立大塚小学校） 椿本 幸恵（宮崎市立東大宮中学校）